
蒼鎧闘駆(ブルーウォーリアー)の幻想疾走

鎌足鹿又

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーウオーリアー
蒼鎧闘駆の幻想疾走

【Nコード】

N4554S

【作者名】

鎌足鹿又

【あらすじ】

正義と、悪。物語には、そのどちらかに傾いたキャラクターが必ず存在する。正義の味方が、悪徳の味方が。しかし、それが真実であろうか。これは、一人の青年が幻想の地で“真理”を知る。勇者でも、ましてや魔王でもない、“人間”ファンタジー。始まります！

プロローグ

子供のころの夢。

この場合の夢とは睡眠時に見る物ではなく、言わば将来への希望の方である。

自分が、どんな者になりたいか。

社会の厳しさや虚しさを知らない子供で、男の子ならば『正義の味方』と答える者は少なくないだろう。

正義の味方 言い方を変えるならば、それはまさしく“英雄”であり、“善”という印象が強い存在だろう。

そして少数派であるだろうが時に『悪役』と答える子供もいるだろう。

悪役とは文字通り、殆どの人間から無条件で？悪？という印象を受けるだろう。

“善”“悪”。

この双方は、あまりにも曖昧で不安定だ。

“善”と不特定多数が決めた事が、本当に“正しい”のか。

“悪”と不特定多数が決めた事が、本当に“間違っている”のか。本当はどちらも正しくないのかもしれない。

本当はどちらも間違っていないのかもしれない。

それを判断するのは個人であり、社会であり、国であり、法であり、世界でもある。しかしどれもが一つの意見であり、どれもが一方通行の答えではない。

本当にそんなものが、そんなものに善悪を定める物差しになるのか。

なる、と答える人もいるだろう。ならない、と答える人間もいるだろう。

しかし、どれもが一方通行。けっして交わらない物。

何が正しくて、何が間違っているのか。

それが真がどうかは、個人で判断するのは難しい。
しかし。しかしである。
もし善も悪も定めずに、
ただ人を守りたい、
人を幸せにしたいと願い、
それを叶えるのは、
英雄ヒーローでもなく、
悪役バットでもなく、

ただの“人”なのではないか。

プロローグ（後書き）

これからオリジナル小説を中心に活動しようと思います、鎌足鹿又です。至らぬ点もありますが、遠慮なく仰ってください！ 精進出来るように頑張っていきますので、よろしくお願いします！

4月30日／本文修正

起承転結

夏。

多くの人 特に日本人からすれば一番長く、そして一番楽しめる季節であろう。それが学生ならば、まさしく“青春”を謳歌出来る季節である。

無論、言葉通りの春ではないが。

そして今は、その夏の真つただ中。八月の初めごろだ。

本来なら学生は学校に行かず、冷房の利いた部屋の中でのんびりと過ごしているか、旅行などでどこかに出かけているのがふつうである。

しかし。

「……暑っ」

そんな中、一人の青年が青年の通っている学校の屋上で寝そべっている。

青年、というよりも【青年になりかけた少年】と表現した方が正しいかもしれない。

少し大人びた顔立ち。キリツとつりあがった茶色い目。それだけを見れば凛々しい青年なのだろうが、短く切られた髪と少し日焼けした肌の所為で、多少子供っぽく見えている。

青年 川島真護かわしましんごはこの待つ真つ盛りの茹だる様な暑さの中、屋上に寝そべっている。

おまけに屋上の床はコンクリートだ。色こそ熱を蓄積してしまう黒でないものの、コンクリートの性質の所為で熱をため込む。

上からは直射日光。

下からは熱を持ったコンクリート。

その所為で、屋上は長時間いれば脱水症状を起こしかねない場所に変貌している。

熱さだけならば、砂漠にも負けなйдらう。

しかし。

「……暑っ」

真護はそこから動こうとせず、寝転がっている。

そもそも真護は本来、ここにいる必要性のない人間である。

委員会にも部活動にも所属していない。それに今日は夏に一度は行われる学校登校日でもない。

ついでに言えば、真護は現在高校二年生。そろそろ進路について考えなければいけない時期に差し掛かっているものの、夏の長い夏休みを返上しなければいけないほど焦る必要性はない。

ならば、何故真護はここで夏の暑さに喧嘩を売る様な行為をしているのか。

その理由は至って単純　幼馴染である、萌花のせいである。

きもりもえが
木森萌花。

少し茶色のセミロングで、クリツとした黒眼。身長は165cmで、頭一つ分真護よりも小さい。

萌花を見た10人に聞けば8人は「可愛い」と言う。小動物のよくな愛らしさがある。それを真護も否定できない。むしろ真護自身も時々、萌花の仕草や表情に可愛いと思う時もある。

だが、信用してはいけない。

可愛い顔をしていても、その本性は自分の都合をその可愛らしさで相手に押し付けるといふ悪魔。まさに悪女だ。しかも真護ともう一人の幼馴染に対しては、その方法すらもとらずに堂々と我儘を言うのだ。

と、ここまでの説明で察せるように当然真護が意味もなく学校にいる理由である。

萌花はバスケット部に入っていて、しかもキャプテンでありエースでもある。その小柄な体格を生かし、本来のプレイスタイルとは違い小回りのきいた機動性で、エースの地位を不動のモノとしているのだ。

故に、萌花は学校に来る理由が存在する。

それに真護は付き合わせたのだ。

「 理不尽だ」

事情を持っている人間であれば、真護の愚痴も苦笑を交えながらも慰めている所ではある。しかし現在真護しかない屋上では、その言葉に虚しく響くのみである。

「真護？ お前が学校にいるとは、意外だな」

不意に屋上の入り口から声が聞こえる。

一人の青年。真護と同じく真夏の日光の影響か肌は小麦色をしているが、その青年はまさしく“青年”という言葉が似合う容姿をしていた。

黒髪は肩に余裕を持ってかかる程の長さで一つに束ねられている。そしてまるで鷹を思わせるような黒い瞳と、真護よりも高い身長。それらを見れば、誰もが精悍な青年だと思うだろう。

総龍大悟。^{そうりゅうだいご} 真護と萌花の幼馴染であり、親友でもある。もっとも、

萌花から見ればもう一つの役割を担っている男だ。

文武両道という古くからの日本の伝統を体現するような男で、この学校の生徒会長を務めながらも、剣道部の武将も担っている。その凛々しい顔で、今でもファンクラブ（非公式）が存在するほどである。

おまけに家は古くから続く武家であり、今も政界に顔が効くまさに名家。

ここまで来ると、もはや創作物の登場人物であるかのような完璧超人。それが真護の目の前にいる総竜大悟という人間だ。

機械弄りしかできない自分とは、明らかに違う特別な人間。

それが真護が抱いている大悟への印象だ。

別に真護はそれで自分を蔑んでいる訳ではない。機械の修理工場を営んでいる祖父に対して文句はないし、真護本人も機械弄りは好きだからこそ、問題などありはしない。

勉強もある程度出来ていれば良いと思っっているし、運動も人並みで十分だ。

それに大悟と真護は別の人間。同じ人間であるわけではないし、そこに嫉妬や自嘲を入れることこそ、真護にはあり得ない事だった。

「真護。人が話しかけていると言うのに、無視とは頂けないな」

真護が起き上がって顔を上げると、少し不機嫌そうな大悟の顔があった。

「悪い、聞いてなかった」

「まったく……まあ、この暑さだ。この中でねっ転がって、熱中症

にならないお前が不思議でしょうがないよ。

ほら、飲め。水分補給くらいしろ」

真護の言葉になのか、それとも真護の行動に呆れているのか。大きく溜息をつきながらもスポーツドリンクを渡してくる大悟。真護の考えが正しければ、おそらく前社だろう。

先ほどから 現在進行形ではあるが 渴きで悲鳴を上げている喉に、真護は一気に容器の半分ほどを飲みほした。

「それほど喉が渴いていたとは……真護、お前いったいどのくらいここにいたんだ？」

「覚えてないな。三時間までは見てたんだが、その後は時計見るのやめたんだよ」

燦々と降り注ぐ陽光の中では、ポケットの中におさまっている携帯を見る気も失せるというものである。

その気持ち的理解できるのか、大悟も苦笑だけでその事に何か言おうとはしなかった。

「……それにしても、萌花も少し遠慮という物を知るべきだな。私とはともかく、お前はここに来る予定ではなかったのだ。それを無理矢理とは頂けない」

少し思案顔をする大悟は他人から見れば“天真爛漫な子どもの躰けに困っている親”の姿そのものだろう。実際、他人ではなく幼馴染で親友というポジションを取っている真護にさえそう見えた。

「あいつも、流石に照れくさいんだろうな。お前と二人つきりっていう状況がさ。まだまだお前らは恥ずかしがってるからな、そうゆうの」

「……耳が痛い話だな」

真護のストレートな言葉に、大悟は先ほどまでの厳しい表情を解き、どこか気恥ずかしそうな表情になっている。

大悟と萌花は、この夏が始まる前に交際し始めた。簡単に言ってしまうえば、彼氏彼女の関係になったと言う事だ。

この三人組は、年齢一桁。五歳の頃からの付き合いだ。その頃から、大悟と萌花はお互いに好意を寄せている存在だった。

そこから12年間。お互いの気持ちを知らないのは本人たちだけでいつも一緒にいる真護からすれば「もうさっさと付き合い合っちゃまえ」と言いたくなるような、まさに青い春の雰囲気を出していた。

真護にとつて萌花は同い年であろうと手のかかる妹であったし、大悟は大の親友だ。お互いが一緒にいて幸せを感じられるのであれば、それでも良い。だが、このまま適当な関係は見てて良い気分ではない。そう思つて、真護はあらゆる手を尽くして二人の距離を縮めさせた。

元々両者共お互いの事を好きであつたから、案外簡単ではあつた。それでも、かなりの労力を使ったのだ。

だが大悟と萌花が付き合い合つに当たつて、二人はある約束事をした。付き合い合つたからと言って、真護を仲間外れにするというのは止めよう。

もっとも、二人ともまだ二人きりで過ごすという事そのものに恥ずかしさを感じているのもあるが、結果としては前の状況と殆ど変わらない。

よつて真護は現在でも萌花に用もない学校に連行されるという、

本人からすれば大迷惑な所業をされているのである。

「いい加減、大悟も萌花も慣れるよ。俺の事は、そんなに気にすんな。」

別に、これで幼馴染としての付き合いが無くなる訳じゃないんだし」

真護からすれば軽い気持ちで言った言葉に、大悟は恥ずかしそうな笑みから、先ほどよりもずっと不機嫌そうな顔に変貌する。

「そついう問題ではない。それに、お前に気を使っているわけでもない。」

私と萌花は確かに付き合い始めたが、それでこれまでの生活を変えられる気はない。勿論、二人きりになる時はそつするがな。

それに、お前がいないと私も萌花も寂しいのだ。察してくれ」

真剣な表情で、自分の顔を覗き込んでくる大悟。

……大悟は実直だ。どんな事も包み隠さず、はっきりと物を言う。相手が反論するべき相手であればきつちりと否定の言葉を言いつし、相手が本当に大切なのであればそつ言う。

そして今真護に言った言葉も、きつと嘘ではないのだろう。

それ故に、真護は猛烈に自分の心の奥底から来る“照れ”と戦わなければいけないのだが。

「……………そうか。なら、勝手にしろ」

喉の奥からようやく出てきた言葉は、いつも通り粗暴な言葉。どつしても恥ずかしさという感情を隠す時、真護はこつゆつ風に乱暴な言葉になってしまう。

この言葉使いのせいで、かなり他のクラスメイトには評判が悪い。

真護もそれは理解しているのだが。

「……ああ、勝手にするさ」

勿論幼馴染である大悟はそんな事をとっくの昔に理解しているため、信吾に笑顔を向けてただそう言うだけに留める。

その大悟の“大丈夫。お前の本心は全部わかっていさ”と言いたげな表情が余計に信吾の恥ずかしさに勢いを与え、信吾はそのままその場にねっ転がる事で大悟に悟られないようにする。

「寝るのか？」

「……暇だからな。萌花が来たら起こしてくれた」

それだけで大悟に言つと、信吾はゆっくりと目を閉じる。

せめて夢の中だけでも、こんな恥ずかしい思いが運び込まれないように願いながら。

そこは、一面が白く染まった部屋。

正確には、部屋というよりも、空間と言つべきかもしれない。

そこには、壁も、天井も、地面さえも存在しない。設定されていない。

そんな場所を、人は、人間はどうしても“部屋”と認識することが難しい。

「……またここか。いい加減にしてもらいたいもんだな」

唯一この空間で認識できる自分を頼りに、真護はそう恨みがましく呟く。

実はここには、もう何回も来ている。いや、着てしまっているという表現の方が正しいだろう。ここ十日ほどは、もうこの一面白い情景の夢しか見ない。しかも、最初から夢だと認識できる、俗に言う明晰夢というやつだ。

しかしここにも、一応登場人物らしき人物がいる。こうして真護がぼくっとしている時に限って表れる存在。

「うむ。今日もよく来たな」

とたんに、白く何も認識していなかった場所からそれは現れる。

それは白く、しかし質素な装飾がされているテーブル。

それは白く、しかし質素な装飾がされている椅子。

それは白く、しかしはつきりと喋る老人。

……最後の余計だったかもしれない。その老人はまるで、どこかの物語で出てくる賢者のような。または、神様のような姿をしている。白いローブに、白い髭。白く腰まで届いている髪の毛。老人の肌以外は、この空間と同じく白一色だ。

「いい加減にしろよ、クソ爺。何で毎回毎回、こんなつまんない夢見させられるんだ。こっちはたまったもんじゃねえよ」

真護は辛らつな言葉と共に、まるで刃物のような鋭利さを持った視線で悠然と椅子に座っている老人を睨みつける。しかし老人はそれに動揺も何もせず、ただ少し愉快そうに目を細めるだけだ。

こうして老人と会うのもちょうど十回。最初の数回は丁寧に敬語を使うよう努力していたのだが、目の前の老人の堂々とした態度と真護では意味を理解できない言動の所為で、すっかりその敬いも消えていた。

「ふむ。毎回毎回申し訳ないと思うとるんだが、如何せん君がしっかりと儂の質問に答えてくれなければ、儂も移動出来んのじゃ。勘弁してくれ。」

お詫びと言っては何じゃが、美味しい紅茶と菓子だけは用意しておるぞ」

そう言われてテーブルの上をしてみる。

確かに置いてある。暖かそうな湯気とたてた紅茶に、綺麗に皿に盛られているマドレーヌ。

それはいつたいたいいつからあったのだろう。少なくとも、最初目にした時にはそれがなかったのは確かだ。そもそも老人もテーブルも椅子もここには存在していなかった。

まるで瞬間的に現れたように。

まるで自分が認識できなかったように。

それらはそこにあった。

……もつとも真護は『まあ、夢だしありえるな』という一応の答えを導き出していたので、その疑問もとうになくなっていったが。

「で、あんた結局誰なんだ？　そもそも、何で俺の夢の中にいる？」

椅子に少々乱暴に座りながら、いつも通りの質問を投げかける。

しかしこれも、真護は何回も問いかけている事なので答えは解っていた。

「ふむ。残念ながら俺の存在を明かす事は出来ん。まあ、似たような存在を上げるとすればそれは、“神”じゃな。

もつとも、俺は君の今いる世界の神ではないがね」

これも何度も聞いた回答だ。

神。

地球には数え切れないほど神と定義された存在は多くいる。真護が暮らしている日本は八百万やおよそという言葉が生まれるほど多い。それくらい、言い方は悪いが“有り触れている存在”ではある。

しかし、未だ嘗て本当に神と出会ったという人間はいない。会ったと証言する者はいるが、それはあくまで自称が付く程度。本当に出会っていた課と言われれば、違つと言つ根拠がある。

だが、真護の目の前にいる老人は自分を神だと自称した。

この場が現実であれば違つと断じる事も出来るだろうが、ここは真護の明晰夢の中である。と言う事は、明確に違つと否定できないもつとも、そもそも夢であるという事そのものが否定につながりもするわけだ。

「……信用は出来ねえな。そもそも、俺は神様を信じちゃいねえ」

「じゃろつのお。少なくとも僕は、どうにも神様らしくないからのお。威厳がないのは否定出来んわい」

真護の否定的な言葉に全く動じる事もなく、老人は美味しそうに紅茶を飲んでいる。

……そうゆう仕草そのものがもはや信用できない要因でもある。仮にこの現象が真護だけではなく他の人が見ていたとしても、目の前の老人はやはりただの老人という評価を免れないだろう。

実際、真護もそう思っている。

「ふむ。まあ、ひとまず落ち着くべきかのお。ほれ、紅茶が冷めてしまっぞ」

その落ちつかない元凶に言われてもな、などと心の中で呟きながらもカップを手にする。こうゆう所は、やはり真護の魅力的な部分と言っべきだろう。

はまだ飲むには多少躊躇われる熱を持っている紅茶に息を数回吹きかけると、少量だけ口に含む。真護が紅茶を飲む時と言えば、大抵がインスタントである。大悟は家の影響からか日本茶しか飲まないし、萌花はコーヒー党である。そもそも紅茶とはあまり接点はない。

しかしそれでも、今口に含んだ物を美味しいと思えると同時に、かなり高級な物なのではないかという庶民染みた思考ができる。

それほど、今口に含んだ紅茶は美味しい。

「美味いかの？ やはりお主の世界の食べ物も飲み物も中々良い。僕はこの紅茶が一番好きでのお」

「……最初の威厳はどこに行ったよ」

真護がこの夢を最初に見た時ではかなり神と信じられるほど威厳

に満ち溢れていた気がする。少なくとも、紅茶も茶菓子も出されなかった。

ただ目の前で椅子にふんぞり返っている。その時ならば、神という自称も信じる事が出来ていただろう。まあ、信じられなかったからこそ今の状況なのだ。

「無茶を言うでない。儂だってあの威厳を出すと言う行為には肩もころろ。流石に、歳じゃからな」

「だから！！ 神とか自称するなら年齢とか気にするなよ！！」

流石に我慢の限界だったのか、真護はかなり大きな声で怒鳴りつける。

この光景だけ見れば、孫と祖父の戯れのように見えていただろう。だが、そんな客観的な見方が出来るほど真護は冷静ではないし、この状況で冷静になれる胆力も備わってはいなかった。

「そう怒る事もなかるうに……まあ、良いか。

茶会はこの位にして、本題に入ろうか」

老人が小さく溜息をつきながらもそう言った瞬間、紅茶もマドレ―又が乗った皿も全て消失した。

本当に“消失した”という言葉が似合うほどあっさり。現に、真護の持っていたカップでさえ近くされる間もなく消えたのだ。

こうゆう所だけを見れば、まさしく神の所業だろう。

「では、また同じ質問をさせてもらおうかの

のう、真護よ。世界に必要な人種は、“英雄”かの？ それとも“悪役”かの？」

まるで祖父が子供にナゾナゾを出すような。そんな明るい響きを感じさせるような声色で、老人は真護に聞いた。

英雄。それは偉業を成し遂げた者たちの総称。言わば称号のようなものだ。

神話に出てくるような現実には起こり得ないと思われる偉業から、実際に戦争で戦い功績を残すような事まで。どちらにも言える事は、本来の人間にはできない事をした者達の事を、人は英雄という。

そして悪役。これはテレビのヒーロー物で必ず登場する敵の事ではなく、正し意味で悪である物の総称。人を恐怖のどん底に叩き込むか、或いは人を甘い誘惑で墮とすか、多数から悪行という事柄を成す者。しかし皮肉な事に、英雄と同じく本来の人間にはできない事をするという事。

相反すると同時に、隣り合わせの存在。
それが“英雄”であり“悪役”である。

「……どちらが必要か、か。そんな事聞いてどうするんだ？ 何度聞かれても、俺の答えは変わらないぞ」

しかしこの問いも、また十回中十回は聞かれた質問であり、流石に真護ももつうんざりという顔をしている。

だがそれでも、老人は頬笑みを絶やさない。

「別に答えを変えてくれる必要性はないんじゃない。しかし、君の答えが中々興味深かったからのう」

「俺は俺の思った事を言っただけだ」

「それでも、儂にしてみれば興味深い。他の意見と言うのは、あまり聞いた事がないのでな」

と言う事は、そう理由だけで真護は十回もここに呼びこまれたことになる。その事に苛立ちを感じながらも、真護は面と向かって怒る気にはなれなかった。

それは老人の眼から偽りを感じない。

例えばどんな存在であろうとも、嘘をつく時は眼の色が濁る。だが老人は、ただその眼を揺らぎもさせず真護を見つめている。

「じゃあ、答えてやらあ。

“英雄”も、“悪役”も、必要ない。世界に必要なのは、ただの“人間”だよ」

真護の眼は揺らぐ、それが当たり前化のようにそう言った。

その言葉に老人は少し笑みを崩し、少し驚いた表情になる。だがそれもすぐにいつも通りの笑みに戻ってしまった。

「……儂は何回も言ったはずじゃのう。世界を変えるのは唯一“英雄”であり“悪役”であると。しかし何故、人間なのじゃ。

人間とは、非力で、傲慢で、怠惰で、強欲じゃ。それが本当に世界に必要なのかのう。必要ではないとは言切れんが、必要だと断言も出来ん存在。それが人間じゃぞ」

今までまるで固定されたように同じ質問を繰り返していた老人が、その流れを変えた。質問からの、新たな質問。

しかし真護はそれに動じなかった。まるでさも当たり前化のよう

に言葉を紡ぐ。

「……確かにジジイの言うとおりな部分もあるけどさあ。俺は知ってるよ、優しい連中もいるって」

自分を生む代わりに死んでいった母。

今はどこかに行ってしまったが、それまでは良い父だと感じられる父。

口は悪いが、真護にとっては大事な祖父。

幼馴染で、もしかしたら誰よりも心を開いているかもしれない萌花と大悟。

少なくとも真護からすればこの人たちだけは、どうしようもなく優しく、良い人たちだと思えた。

だからこそ、目の前の老人が言った言葉にどうしても納得がいかなかった。

「そうか。お前さんは良い人たちをめぐりあえたんじゃないのう」

「……なんか、そう言われるとテレる。というか、何であんたにこんな話してるんだらう」

今更羞恥心を感じ始めたのか、真護は少し照れくさそうに首の後ろを掻きながら有らぬ方向に視線を向ける。

それでも老人は、少し微笑ましそうな顔を崩さない。だがその表情には、先ほどよりもずっと人間味があるように見えた。

「……ふむ。俺ももう少し、人間を信じてみようかの。君のようにまだまだ諦めとらん若者もいるようじゃし」

老人はそう言いながらゆっくりと椅子から立ち上がる。真呉がそれを見て少しして立ちあがると、椅子もテーブルも消失した。

相変わらず、これはどうゆう原理だろう。少し頭を働かそうとするが、残念ながら真護の脳はそうゆう処理に適さないようで、すぐに考える事を放棄した。

「まあ、君の答えが聞いて良かった。また会う機会があれば、その時に話そうかの」

「はいはい……ん？　おいおいジジィ、またここに呼ぶんじゃないだろうな」

流石に二桁に届いてしまったこの明晰夢をまた見る羽目になるのか。流石にそれも我慢強い（自称）真護にも限界である。

「いや……そうじゃな。もし君に何かあれば。またここに来るような事もあるじゃろうのう」

「何かってなんだよ。面倒事じゃなければ良いけど」

真護の意外と本音が混じった軽口に、老人は可笑しそうに静かに笑う。

「心配するな。お前さんの条件が満たされなければ、もう会う事もないじゃろうのう」

「条件？」

「……まあ、それも解らない方が良いじゃろう」

老人の言葉の意味が分からない真護が首をかしげていると、耳元で小さな声がささやくのが聞こえた。

本当に小さいが、妙にはっきりとした声。これはもしかして、大悟だろうか。

「外で誰か呼んでいるようじゃのう」

「みてえだな。もしかしたら、萌花が戻ってきたのかも」

この白い夢では、時間の感覚が解らなくなる。ほんの一時間しか感じなくても、向こうでは夜が明けていたなどと言つのを何度も経験している。

ここでは、時間の流れが極端に短い。それがこの空間の所為だからなのか、そもそも夢だからなのか。それは真護にも解らない事の一つだ。

「ふむ　それではの、“人間”」

「　真護。そろそろ起きないと面倒な事になる」

夢の中で聞こえていた声が、とたんに大きくなる。おそろく、眼が覚めたのが原因だろう。少しの眠気に軽い呻きを上げながら、真護は身をよじらせる。

寝た気はしない。何て言っても、あんな意識のはつきりする夢の中で動き、話していたのだ。だが眠気とは非情で、実際に眠っていたからだからまだそれは抜けない。

その違和感に耐えながらも、真護は薄目を開ける。

「面倒な事って、なに？」

まだ少ししか開かれていない眼で大悟を見れば、少なくともそれほど危ない事ではないのだろう。しかしちよつと苦虫を噛み潰したような苦笑を浮かべているのも真護には気にかかった。

「ああ、それは」

「私が今この瞬間滞空し、そのまま真護に落下するからデス！」

「なっ　ぶべらっ!？」

大悟が説明しようとする瞬間、巨大な影は降ってきた。巨大と言っても、平均より小さい女性の影。

つまり萌花が　何故かかなりの高度まで跳び上がり、そのまま真護に落下してきた。

それまでならば良い。いや、おそらく真護にとつてはまったく良くはないのだろうが、それならば体重が落ちてきただけで「重い」の感想のみで終わっていたところであろう。

しかし不幸にも、彼女が折り曲げていた肘は見事に真護の腹に直撃。それによって起こる苦痛により、真護はあえなく情けない悲鳴を上げている。

威力だけならば、ハンマー・エルボーも比ではないだろう。何と

言っても、人間一人の重さが重力に従って落下し、その威力をそのまま肘に込めたのだ。

痛い。どこが痛いと言われると、表面的な部分ではなく内臓的な部分を物凄い鈍痛が真護を襲っている。現在進行的で。

「……と言う事だ」

「そう、でしたら、もっと早く、説明を、」

「その前に、お前は最初の言葉で起きるべきだったな。萌花がいれば、悲惨な事になると言うのは解っていただろう？」

「それも、そうだな、」

息も絶え絶えでこんな話をしている所を見れば、真護もそれほどダメージを受けている訳ではないようだ。部活をしていないとはいえ、毎日のように修理工場を手伝い、重い物を持つたりと力を要する。

それで付いた筋肉で何とか危機を乗り越えたらしい。

「む、ちよつと二人ともひどくない？ あたしの可愛いお茶目を、無視ですか？ 無視なんですか？？ も一発いつとく？」

いつも通り、人の心の隙を突くような可愛げな表情。もっと端的に言ってしまうば、自分が可愛いと解っている表情。

これがスペックも伴わない暴拳であったなら「自意識過剰」という称号をプレゼントする所だが、スペックが伴うどころか余りあるのが始末に負えない。

「いや、それはいらない」

真護と大悟が同じタイミングでそう言うと、萌花も流石にやり過ぎと言つのを解っているのだろう。だが渋々と言つ感じで、その場に座り込む。

何とか痛みも収まってきたのか、真護はゆっくりと空を見上げる。

空はもう、濃い紅色に染まる夕焼けになっていた。夏も真つ盛りなので、この夕焼けの濃さからするならば、きっともう七時は行っているだろう。

萌花の部活は六時に終わる。それを考えれば、一時間も余ってしまつた。

「……待ってて、くれたのか？」

真護が寝ていたのを見て、起こさず待っていてくれたのか。そう思つて訊くと、苦笑を浮かべる大悟と心底楽しそうな笑みを浮かべる萌花。

「いや、私は起こそうとしたのだがな。萌花が、」

「だって、真護ってあんまり自分の寝顔見せないじゃん。こうゆう時じゃなきゃ、予想外に可愛い笑顔は見れなかったしい」

……どうりで嬉しそうにしていたわけである。

真護が寝顔を見られたくないというのには、別に対して理由があるわけではない。ただ単純に、人に自分の気の抜けた時の表情を見せたくないだけ。

理由としてはただそれだけの事と言われればそれまでの話だが、真護にとっては意外と死活問題だったりする。

なので、真護の顔は今空にできている夕焼けと同じく真つ赤になつていた。

「そうゆうの、どうかと思うぜ。人の気の抜けた時の顔見るなんて、」

趣味が良いとは思えねえ」

「そうなんだけどねえ。でも、大悟も真護も他人にそうゆう表情見せないじゃない？ 嬉しそうな顔とか、優しい顔とかはもう何回も見てるけど、そうゆうの気になっちゃって」

不機嫌な声で真護がそう言うと、萌花は少しだけ申し訳なさそうな顔で（本当に“少し”ではあるが）そう取り繕う。

まあ、そう言われると本気で怒れないあたりは、やはり真護がお人好しであるからこそなのだろう。

「……解ったよ。んじゃ、そろそろ帰ろうぜ。萌花に振りまわされて、腹減ってたんだ」

そう言いながら真護は立ちあがる。

「ふむ、良いな。久しぶりにマグドはどうだ？ ジャンクフードを推奨する訳ではないが、たまには良いだろう」

「あ、それ賛成！！ 私も部活やっておなか減ってるんだよねえ」

まるでそれを合図にしたかのように、大悟も萌花も立ちあがった。萌花はスカートに着いた塵をはたくという動作も追加してだが。

「……………ねえ、真護。それ本気で家で食べるの？」

「夜食だ」

「……………真護。それは流石にどうかと思うのだが」

「うるせえ、夜食ったら夜食なんだ」

少し大きめの紙袋を下げている真護に対して、大悟と萌花の反応は微妙だ。表情だけ見れば完全に引いている事は理解できる。

時間はもう八時を回った所。夏と言ってももう暗く、街の中は人工的な光に照らされている。

勿論、三人はマグドナルドで食事を終えた帰り道。だが真護は帰る段になってハンバーガーを三つ、ポテトフライを二つ、チキンナゲットを二つ購入したのだ。

その前にハンバーガー・ポテトフライ・ドリンクのセットを二つほど食していたのが、二人が真護にドン引きしている原因である。

元々大食漢ではある真護だが、今日は一段と良く食した。正確には、家に帰った後も食すのだが。 ようだ。

「まったく、その熱量がいったいどこで消失しているのか小一時間問いただしたい物だな」

「本当だよ、私なんていっぱい食べるとすぐに響くのに」

大悟は興味深げに。萌花はどこか嫉妬げに。

両者の抱いている感情に差はあれど、二人とも“不思議”という意味では同じ言葉を真護に向ける。しかし、真護はそれに不思議そうな顔をした。

「何言ってるんだ？ こんな量、勝手に消化されんだろう。俺だって、何もしいない訳じゃないんだから」

夜は祖父の機械弄りの手伝いをして就寝し、朝早く起きて食事を作り、また日がな一日中工場で機械弄り。それが真護の夏休みの過ごし方である。

しかも工場の中は空調が上手くいっていない所為で、まるでサウナのような暑さがこもっているのだ。その中での作業なのだから、カロリーも消費して当然である。

「それにしても、その量か」

「良いなあ。あたしも工場にずっといようかなあ。その方が少しは体重落ちるかも」

大悟が何故か感心するようにうなづいている横で、萌花は悔しそうな顔で自分の腹を触る。

といっても、萌花は現在でも痩せて見えるのでそこまでの必要性は、真護も大悟も感じない。だがそこは、現状に納得が出来ない乙女心というべきか。

「大丈夫だ。萌花はそれでも十分魅力的だよ。私が保障しよう」

そしてさらっと惚気染みた事を言う所は、大悟の長所であり短所でもある。しかしこの場合は良い効果をもたらしたらしく、萌花は顔を仄かに赤らめながら恥ずかしそうにしている。

「うん……大悟がそう言うんだったら、別にこのままでも良いかな」

恥ずかしそうにしながらも、その顔には嬉しさが見える。

まあ、こんな顔が見れたってのは良い事なのかもしれない。

そう真護は思う。

例え目の前でカップル特有の砂糖が十キロほど空気中に散布されたような甘ったるい空間が出来ていたとしても、真護は鬱陶しがない。

むしろお互いの気持ちに気付かず、中途半端に甘い空気よりもずっと良い。それが真護の抱いている感想である。

この時間がずっと続けばいい。

ありきたりで、どこにでもあるような願い。このまま大悟と萌花、三人でのんびりと騒がしく、そして楽しく幸せな毎日を送りたい。

小さな願い。だがそれは、真護にとっては何よりも大事で大きな願い。

ただ、平穩をと。

しかしまだ知らない。それが呆気なく終わりを告げると言う事を

それは唐突な出来事だった。いきなりの叫び声。その場はあまりにも唐突に恐怖に支配された。

理由はあまりにも単純で、他人事のように見てしまうと間抜けな事。

ただの……トラックの暴走。それが今、三人に突っ込もうとしていた。

真護の横にいる二人は、動こうとしない。あまりにもとっさで動けないといったところだ。

このままでは、三人とも死んでしまうだろう。

“このままでは”の話だが。

「しょうがねえなあ」

いつも萌花に無理矢理付き合わされる時に言う口癖が、何故かこの時真護の口から洩れた。

体は、自然と動いた。

未だに自体が飲み込めていない萌花、ようやく気づき萌花の腕を掴んでいる大悟。その二人を、そのまま肩で渾身の力を込めて押しやった。その勢いの所為で二人は倒れこむが、それはどう考えても、トラックとの衝突を避けられる場所ではあつた。

本来ならば、真護一人の人間では飛ばせない距離。俗に言う火事場の馬鹿力というのだろう。今回それを出せた事に、間抜けな事だが真護は心の中で感謝した。

「っ、真護！」

大悟の声が聞こえる。見るとそこには、かなり遠くまで飛ばされた大悟と萌花の姿が合った。

大悟はいつもの冷静な表情が崩れ、まるでこの世の終わりのような顔をしている。

萌花は未だに放心状態から抜け出ないのか、真護を虚ろな目で見ているだけ。

んな顔すんなっつうの。最後になる

んだから。

そう言いたかった。言おうとした。

だかもつすでに、トラックは物凄い勢いで……真護を吹き飛ばしていた。

ああ、終わっちまった。

人にとっての“死”というものはとてつもなく重いものだ。
例えどんな死に方をしていようと、それは誰の認識でも同じ。

人にとって、死とは強烈で、平等で、重い。
だが真護が感じている“死”は、その考えに反してあまりにも軽かった。

体と言う重しが消失し、ただ“魂”と呼称される自分自身が存在するだけ。それはあまりにも薄く、軽く感じられたのだ。

「鎖は今を持って解き放たれた。よって汝の選択によって、その意思に新たな体、新たな力、そして新たな友を得るであろう」

何も見えない状況。何も聞こえないはずの状況。体という一種の外部通信端末を失ってしまったはずの真護の中で、夢に出てきた老人の厳かな声が響く。

今、何もなくなってしまった真護は、その声に身を委ねるしか術はなかった。

「……これからの生活は、汝が過ごしてきた日常と相反するものとなるであろう。

今まで培ってきた物全てを捨てねば、新しい何かを得られはせん。知識、経験、価値観、周囲の環境、親族。そして、友も。

お主はその全てを捨てさっても、生きる覚悟はあるか？」

老人の言葉に、真護は残った思考を一気に働かせる。

平凡な生活を送っていた。学校へ行き、大悟や萌花と無茶をする。祖父の向上を手伝い、明日また同じように平凡で平穏な生活を願って眠った。

そんな、ありきたりな出来事。ありきたりな世界。だが真護にとっては、何よりも大事な、掛け替えのない日常。

それを、捨てる。

捨てなければ、生は得られない。

それでも、ただこのまま死んで行くのはきつと、真護という人間の考え方に反する。それは同時に、今まで一緒に生きていた人々を否定することになる。

蘇る訳ではない。大悟と萌花に二度と会えない。
だが、しかし、

どこか遠い場所。もう二度と会えない場所で、大悟と萌花の幸せを願って暮らすのも、悪くはない。
そう思ったのだ。

「承知した。」

ではな、川島真護。僕の期待を、裏切らんでくれよ」

起承転結（後書き）

4月14日／タイトル編集

起？

「　　」

目の前で起きている何もかもを視認できなかった真護の視界に、まばゆい光が差し込む。

いつも感じている人工的な光ではなく、太陽の光だ。

それを真護は、瞼越しに感じていた。そう、瞼が存在する。

先ほどまで漠然としていたはずの“自分”という存在が、はつきりと重みとして理解できるようになっていた。

重さを感じなかった体は重みを。

光りを感じなかった眼は光りを。

音を感じていなかった耳は音を。

触感を感じなかった手はサラサラとした砂を感じ取っていた。体から得られる情報を、今では正しく自身に与える事が出来ている。

「　　」

次に真護は感じたのは、身を焦がすような暑さ。

ほんの少し前までいた学校の屋上とは比較にならない位暑く、湿気を感じないカラツとした暑さ。

『なあ、そろそろ起きようぜ、相棒。』

このままじゃ、この砂漠のど真ん中で新鮮なミイラが一体出来ちゃう。

そしてその次に感じたのは、声。さもどこかのヤンキーなどが喋る様な、遠慮のない軽い口調で生まれた言葉は、人間のようでもあるがそれは言語だけの話だ。人間の声にしてはあまりにも自然に響く。

音響効果でエコーという者が存在する。それは同じ音声が発音と

して追隨するものだ。それに近い声が、今真護の耳には届いている。

『……おいおい、まさかこんな始まりで死んじゃまう、なんて事はねえよな。』

勘弁だぜ、俺は。せつかく俺が活躍するような状況になったのに、物語が始まった瞬間 the endな状況はマジ勘弁だ、ほら起きろよ相棒！ 一緒に冒険の旅に出発しようぜ！！』

……真護の感想からすれば、かなり耳障りな声だ。

真護の友人関係は、大悟、萌花、あと同年代のクラスメイトが数人。さらに祖父の知り合いという歳上の人間しかいない。

大悟は家の教育の所為かかなり堅い喋り方をするし、萌花も親の教育が良かったのか少なくともこれほど軽い口調ではなかった。フレンドリーではあった。

しかし知り合いにも何人が口の悪い人間はいたが、それは勿論祖父の知り合い。つまり歳上の人間であって、しかもべらんめえ口調なだけである。

よって今真護が聞いている声のような軽い口調という物は、周囲で聞いているだけで充分。話す気も起こらない。

それも、本来ならば、という言葉が付くが。

「……起きてるから、そう耳元でギヤアギヤア叫ぶなよ」

そう言いながら、真護は無理矢理上半身を起こす。

体がいつも以上に重く感じる。体をなくしていた時間はほんの一瞬间に感じられていたが、そもそも体がない、などという状態がありえない。

それ故に、体が戻って来てもそれをいつも通りに動かす事が出来ない。どうしても、ワントempo遅れているように感じていた。

「……とりあえず、解った。何かもう、解りたくないけど解った。つつか、さつきから話しかけてくるのはどちらさんですか？」
『おう、よくぞ聞いてくれた！！俺の名前はフギン！お前さんの相棒って奴だ。これから色々とお前さんにこの世界の事を教えるからまあ、よろしく頼む！！』

真護の言葉に、声　フギンは嬉しそうに答える。

ちなみに、フギンとは北欧神話に出てくる二匹のワタリガラスの一羽であり、名前は“思考”を意味する。

もっとも、真護はその手の知識を知らなかったためスルーした状態ではあるが。

「まあ、一人じゃないってのは心強く思っただけどさあ……お前どこにいるの？」

そう言いながら真護は周囲を見渡す。

真護の眼には言っているのは、砂のみだ。多少丘のようになっている場所などもあり波立っているのは良く見えるのだが、一向にフギンの姿は見えない。

まさか砂の中に潜んでいる訳でもないだろう。というか、そんな事を嬉々としてやる人間は滅多にいない。いるとしたら変態と呼ばれる部類であろう。

『バツカだな〜相棒は。んじゃヒント。』

俺は今相棒と完璧同じ位置に立っている。もっとも、位置というだけでお前さんという場所は違うがね』

まるでナゾナゾのような問いかけに眉をひそめるが、すぐに体の隅々まで見渡した。

服装は死んだ時と同じように制服。白いワイシャツで黒いストラップス。おそらく自分がトラックと衝突した時に着いたであろう血糊は一切ない。

体にも何も無い。足の先から頭のとっぺんまで普段と何も変わらない。

ただ 胸で太陽に照らされ光っている紅いネックレスだけが、普段の状態と違う点であった。

「……冗談だろう？」

思わずネックレスを外し自分の目線と同じ高さにまで持ってくる。鈍くではあるが紅く光る細工で鳥を表現しているらしい。小さいながらも細かく、一本一本の羽毛さえも脈動的に見える。サイズは手のひらに収まるどころか、ちょっと握りこめば埋まってしまう大きさ。しかしその鳥の眼には紅い、まるでルビーのような宝石が埋まっている。

『ビンゴだぜ、相棒。お前さんが目の前で見ているネックレスこそ俺、フギン様だ！』

その事実思わず真護は眼を見開く。

真護の世界では科学水準は2010年の域を出ていなかった。少なくとも、こんな小型のネックレスにAIが積み込まれる事は出来ない。そんなモノはアニメの中だけの話である。

そして魔法というモノも存在しない。していたかもしれないが、それもあくまで創作物のお話で、自分が触れることなどあり得ない。だがそのネックレスは目の前で確かに真護と会話をしていた。

「……お前、さっき“この世界”って言ったよな？　つまり俺がいた世界とは違うのか？」

何故、どうしてなどといった疑問の言葉を飲み込み、先ほどからずっと思っていた疑問をぶちまける。

フギンが自分の挨拶で言った“この世界の事を教える”という言葉。そして老人が言っていた、“過ごしてきた日常と相反する”という事。

大悟にも、萌花にも、二度と会えないという事実。

『……相棒が考えている通りだぜ。ここは相棒がいた世界じゃない。まったく違う。』

思想も、価値観も、環境も、国も、真理も、何もかもが相棒のいた世界とは一致しない。

相棒の視点から見れば間違いなくこの世界は“異世界”だよ』

……不思議と真護はそこで、絶望する事はなかった。

元よりどうなっても文句は言わない。それだけは決めていた。

そして少なくとも今の自分には、記憶がある。思い出がある。そして自由に動くからだ、多少本意ではあるが相棒もいる。

ただ放り出されるだけよりは、ずっと親切だ。

そう思う事で、真護は納得した。今の状況全てを。

「なるほどねえ、まさかそんなアニメみたいな状況になるとは。人生って不思議だな」

『……そうだな。』

だが安心しろ！！　俺は一生相棒の味方！　どこにも離れないし、解らないことは教える。これからはずっと相棒だ！！　感謝しろこの野郎！！』

フギンのその態度はフギンが人型であるか、もしくはそれに準ずる姿をとっていれば。おそらく偉そうに胸を張っている光景が見えていただろう。それ程にフギンは偉そうだった。

「 ああ、安心したよ。ありがとう、フギン」

だが、真護はその態度に目くじらも立てずに笑顔でお礼を言い、フギンを首に掛け直す。

こんな事で一々怒っても仕方がない、という諦めにも似た考えがなかったわけではない。しかしそれ以上に、フギンが自分の事を気にかけて空元気を出している事がわかったからだ。

真護も冷静にしている物の、本当に何も気にしていないかと言われれば違う。

例えばどれほど感情を制御しようと、その悲しみは変わらない。

もう祖父とロゲン力する事も出来ない。

もう学校に通う事も出来ない。

もうあの世界には戻れない。

なによりも 自分は一生、大悟と萌花に会えない。それだけは、真護には解っていた。表情で隠そうとも、それは見えないナイフのように胸に突き刺さる。

真護がどれほど呆気なく死のうが、死は死だ。それ以上でも以下でもない。

勿論、それで生きて行く気力まで失う気はない。全ての環境を捨て去ってまでも手に入れた生を精一杯生きたい。

だからと言って、この悲しみを捨て去る事だけではどうしてもできなかった。

それを知っているからこそ、今自分の首元で揺れている相棒は自分を励ます為にここまでお喋りなのだ。

……まあ、元の性格もあるのだろうが。

「とにかく、この状況を確認しなきゃいけないな。ここがどこだか解るか？」

先ほどまで行っていた思考を打ち切り、フギンにそう訊いてみる。真護の考えが正しければ、おそらくこの体は生前とまるで変わらない肉体構造をしているはずだ。

それを鑑みるに重要なのは、ここにこのままいれば、餓えと渇きで死んでしまうだろうと言うかなり悲惨な結果である。

『よくぞ聞いてくれた、相棒。ここはガラハ沙漠と呼ばれる沙漠地帯。幾つかある国の中の一つの地域だな。まあ、国の事に関しては落ちついた時にでも講釈してやらなあな。』

ここはかなり広大な場所だからな。歩いて出るのは至難の技だぜ』

フギンの無情なまでの答えを聞き、とりあえず心の中で“ファツキンジーザス”と叫んぶ。勿論、神とはこの場合神と自称したあの老人に向けてだが。

「……解った。とりあえず最悪の状況だと言うのは良くわかった。でも、砂漠だからって住んでいる人間がいないってことにはなんねえだろう？ どこかに村はないか？」

いくら砂漠地帯といえど、無人という事にはならない。ここら辺に住んでいる人間もいるはずだ。

人間は群れる種族であり、その本能に準じれば自然と村というものが形成される。とりあえずそこに行けば、何かしらの糸口もつかめると言う物だ。

しかし、フギンの次の言葉もかなり無情であった。

『残念だが、正確な場所までは知識として存在しない。衰退と発展』

がごまめに起こっているからな、この砂漠地帯は。情報を逐一更新するために、この砂漠全体を監視できる目が必要になる。

だが、俺にそんな力はない。申し訳ねえけど』

フギンの役割は助言。つまり、自分が蓄積している記憶や知識などをフル活用して持ち主をサポートするのが役目である。

どんな事にも対応できるように豊富な知識が埋め込まれてはいるが、新しく蓄積するのは大変な労力がある。少なくとも、この広大な砂漠の中で村を探そうとなれば。

風景の通り、大きな砂浜の中で一つの貝殻を探すようなものである。

「まあ、それもしょうがない事だな。

でも、ここでグダグダやっていると本当に即身仏になりかねん。やっぱりここは歩くしか道はないな」

『じっさい、砂があるだけで道なんてありゃしないけどな!!』

「……………」

一言どころか、二言三言ほど多い相棒の言葉を完全に無視して、砂漠の中を歩き始める。

方角は確認しない。元より確認してもどちらの方向に村や街があるかも解らないし、ここで止まっているのは論外だ。

故に、真護は歩く。永久に続くように思えてしまう砂漠の中を。

歩く。

歩く。

歩く。

……………歩く。

……………歩く。

……………歩く。

「……………ああゝあ！！　どんだけあるんだよ砂漠！！」

『相棒、まだ五分も歩いちゃいねえよ』

流れ星が現れ消える程の早さでキレた。

ここで説明しておこう。真護はかなり短気な方だ。

状況によっては勿論我慢もできていただろうが、このどう考えても将棋で言う所の【詰み】な状況ではとてもではないが真護の我慢も聞かない。

ちなみにこれは余談ではあるが、萌花はあの姿から想像もできないだろうが真護以上に見境もない短気で、大悟は普通の人間だったら耐えられないと言うレベルでも表情を変えないタイプの人間だ。きつと萌花ならばもっと前の段階でキレてフギンを理不尽に砂漠に投げ捨てていただろうし、大悟ならばこのあと数時間歩こうが堂々としていただろう。

という訳で、この怒り方は真護特有の物である。

「ちくしょう、あのクソジジイ！　今度会ったらぶん殴ってやる。いや、ぶん殴るだけじゃない。ぶん殴った後ヤクザキツクの嵐だ」
『……………まあ、それ位は許されるはな。なんたってこの状況、どう考えても当事者の事考えてないもん。第三者が面白がるだけだもん』

ぶつくさ砂漠の中心で文句を垂れる青年と、その文句に溜息をつきながらフォローを入れるネックレス。この光景を知らない誰かが

目撃したならば、シニールという感想以外に思い浮かぶ言葉はない事だろう。

もっともこの世界では、フギンもあまり異常なモノではないのだが。

それはさておき、真護は困っている。

この状況に陥って困らない人間がいるのかと聞かれれば否であるうが、今現在この状況に陥っているのは真護のみである。

「お前は良いよなあ。喉渇く訳じゃないし、食事もいらねえんだろっ?」

胸元のフギンに愚痴っぽくそう語りかける。しかしフギンはその言葉に大きく溜息をついた。

「いや、俺もそうゆう訳じゃない。

元より、俺が活動に必要な物はお前の生命エネルギー。つまり“魔力”を使用している。よってお前が死んだら俺も強制休眠。死にはしないが、同時に生きてはいない状況に陥る。俺からすれば、そんな状況は困るわけだ」

「魔力ねえ……魔力!？」

いきなりのファンタジー度アップで真護は思わずその場から跳び上がってしまった。

魔力。

ファンタジー物の作品ではありがちな物だ。定義はその作品によって大きく違いは出るだろうが、共通点の一つ。魔法を使用するためのエネルギーのようなものである。

真護に魔力がある、という事は同時に“魔法”も存在するという事である。

「予想以上に、ファンタジーなんだな。俺の体にそんな物があるなんて」

そう言いながら、真護は自分の胸に手を当ててみる。

心臓の鼓動は何時も通り感じる。しかしその“魔力”と呼ばれる未知のエネルギーがあるようにとはとても思えなかった。

『いや、元々の相棒の体にはそんな物はなかった。』

魔力とその他特殊技能は、あの爺が選別としてお前に付与したものだ。生きている体を弄るのは極めて危険だが、無くなった者を再構成しながら新たな能力を付与する事はたやすい』

淡々と説明するフギンには、先ほどまでの軽い口調ではない。まるで体験入学で受けた大学の講義を聞いているような感覚で、真護は訊いていた。

再構成。

もうすでに、真護の体は本来の体ではない。魔力という不明瞭な力を持っていて、しかもフギンの言い方では他にも能力があるように聞こえる。

まったく、本当に変わっちゃったんだ。

そう思いながら、真護は手のひらを太陽にかざす。

普段通りの手。機械弄りの所為で傷つき、それを直して硬くなった手。懐かしいオイルのにおいさえ感じそうなその手は、変わったという事実を受けるとどこか今までと違うような感覚がした。

『相棒。感傷に浸ってる暇があるなら、前に進もうぜ。』

元々、そう決めたからここにいるんじゃないのか？』

そう。真護は前に進むと決めた。

たとえそれが死という物を体験し、もう二度と大切に退屈なあの世界に帰れないと解っていて、前に進んだ。

それが真護のあり方だと思ったからこそ。それが大悟と萌花に死んだ自分が出る唯一の事だと思ったからこそだ。

「……ああ、解ってるよ」

フギンの言葉に強く答える。

出来るだけ前に、進もう。

大丈夫。どんなにこの体が変わったとしても、心だけは変わらない。そして俺には前に進むための体がある。

それだけで、今は十分だ。

そう思って、前に、

轟！！

「なっ!?!」

あまりにも大きな音と共に、巨大な砂埃が立った。

真護は出来るだけ眼を細め、その砂ぼこりの砂が眼に入らないように顔を手で覆いながらも周囲を警戒する。強風というだけならば安心も出来たのだろう。しかし真護はそうではないと理解していた。何かが目の前にいる。ナニカ自分とはチガウ存在がいる。それだけは理解できていた。

……砂埃がはれると、それは現れた。

「おいおい、冗談じゃねえぞ」

その姿を見て思わずつぶやく。

それはまるで、芋虫のような存在であった。体がまるでホースのようで、体はハムのように段々になっている。砂漠に溶け込むような黄土色をしているが、明らかにその存在は異常だった。

一つは簡単。

大きいのだ。真護の大きさをあまりにも軽く超えている。まるでどこかの怪獣映画に出てきても問題がない大きさ。

そしてその顔が位置しているはずの部分に、顔として備わっていない物がない物が欠落していた。

眼がない。

耳がない。

鼻がない。

ただそこには巨大な口がまるで孔のように広がり、その縁を彩るかのように薄汚れた鋭い牙がその口の奥まで続いている。

化け物。そう呼称されても問題なかった。

「……フギン。村の場所は分からなくても、こいつの事は解るよなあ？」

『へッ、俺様を舐めちゃ困るぜ相棒！ 勿論識ってるぜ！』

こいつの名前は遍く喰らう蟲イト・ワーム！ この砂漠に生息している、亜獣種に属するモノだ。亜獣種というのは、通常の獣達とは違い獰猛で、魔力が備わっているモノもいる。お前さんの世界感覚で言えば

“魔物”の類だ』

魔物 説明を簡単にしてしまえば、化け物と似たような意味になる。人を襲い、惑わし、食らうというのが一般的な魔物という存在の認識だろう。

真護もその例に漏れない。

「じゃあ、 食われんのか？」

「いや、こいつは普段は人間単体を襲う事はない。街や人間の集団を砂と一緒に飲み込みまじまう。

だけどこいつあ、」

フギンの言葉が途切れる。理由はごく単純だった。

見ているのだ。目の前の巨大芋虫 遍く喰らう蟲は真護とフギンイト・ワームを眼がないはずの顔を向け、凝視しているのだ。

そして唸り声というにはあまりにも空虚なその声を低く上げている。

「……こいつは、一人でいようと食っちまおうって腹積もりらしいなあ。

おそらく、ここ最近食事にありつけてないんだろっな」

しみじみと語っているフギンだったが、真護はそんな悠長な事を思っている余裕はなかった。

お腹が減っている + 自分達が目の前にいる「いっただっきまゝす！ の公式が簡単に頭の中ではじき出されたからである。

よって真護は 。

「……………逃げるぞー！！」

全力で走りだした。

方向など定まっていはいない。ただ我武者羅に走っているだけ。だがそれでも一応逃げるといふ体裁は保っていた。

何せ物凄い勢いで遍く喰らう蟲イト・フォームが追いかけてきているのだ。誰が見ても全力で逃げているようにしか見えないだろう。

「倒す方法は、ないのかよ!!」

『あゝ、相棒の能力やなんかを使えば簡単なんだろうが……今その力をしっかりと発現出来ていない相棒は、ごく普通の人間。』

ようは　ごめん無理だわ』

「ちくしょー！　やっぱそうですかこんちくしょう!!」

叫びながらも、足は止めない。一瞬でも足を止めてしまえば、後ろに広がっている有機的な奈落の底にまっさかさまであるのは間違いないだろう。

『ほらほら走れ相棒！　俺も一緒に心中はご勘弁だ!!』

「お前は良いよなあ！　だって俺の首にぶら下がってるだけだもん！」

『バツカ、俺だって足があれば一緒にもうダツシユだ!』

「現に走ってないだろうが!!」

先ほどの殊勝な考えはどこへやらという風に、フギンに暴言を放ち続ける。

この暑さの中全速力で走りながらもそれが出来るのだから、真護の体力も馬鹿に出来ない物であるのは確かだ。

これも神を名乗る老人からの贈り物であろう。こればかりは、真護も感謝していた。

もっとも殴る事に関してはもうすでに確定している事なのだが。

牙アアアアアア!!

咆哮。真護が聞いた事がある動物たちのどれとも違うモノではあるが、それでもそれは咆哮だと認識できるものだった。だがそれは、捕まらない獲物に対しての物ではない。明らかに 害敵に向けての咆哮であった。

「坊や、伏せておきな。後で怪我したなんて文句聞かないよ」

姿は見えない。だがはつきりと声だけは耳に届いた。真護はその指示に従う。ただ地に倒れるだけ。だが。

爆

結果は解った。正確には、音と衝撃のみを感じ取っただけ。しかしそれでも、その爆発は予想以上に激しい物だった。そもそも、爆発という物を想像していなかった。真護の世界での理解で言えば爆発というのは、何か不慮の事故か、もしくは故意に起こされたもの以外に思い当たる物がない。

そう。この爆発は故意 攻撃的意思を持って放たれた一撃だ。

『……もう、治まったみてえだぞ相棒』

フギンの言葉に、真護はゆっくりとした動作で起き上がり自分の後方に眼をやる。

そこには、肉塊が転がっていた。

それしか表現方法が存在しない。まさに肉塊。それが少なくとも自分の物ではなく、あの巨大芋虫のものであったのは充分理解出来た。

「こりや、すげえ」

ただそれだけの事しか言えない。語彙があまりない真護だからという訳ではなく、目の前の光景に正そう言っしかないからこそ出た言葉である。

目の前の肉塊は、一種の絵画のようであった。

おどろおどろしく醜悪でありながらも、その圧倒的な力の証明であるのは確かだった。

『こりや驚いた。かなり高威力の魔法をぶつけない限り、遍く喰らう蟲イト・ワームの体がこんな木端微塵になる事はねえ。

元々奴らは頭を吹っ飛ばしても動きまわる生物だ。それを一瞬で行動不能にするとはなあ』

フギンの言葉を右耳から左耳へと受け流しながら、真護はゆっくりと歩き始める。

砂は先ほどの薄茶色の色を失い、遍く喰らう蟲イト・ワームの体液であるう緑色の粘着液に染まっていたが、そんな事を気にしている余裕は真護にはなかった。

「坊や、怪我はないかい？ まったく。一人で砂漠を歩いてるのは百歩譲って納得するにしても、まさか亜獣種避けの魔力鉱石も持ってないとは。不用心にも程があるね」

凜とした女性の声。

一瞬どこにいるか分からず周囲を見回す真護だったが、そう時間もかからずに声の主は見つかった。

そこには、一人の妙齡の女性が立っていた。

この砂漠にはあまりにも不釣り合いに、真っ赤なスラックスとワイシャツ、そして黒いネクタイを緩くしめている女性。体形は、異常な程スレンダーだ。かといって、出ている所もすっかりと出ているので、見た目に反して純情な真護にとっては目に毒であったらう。

しかし、それも見ていればの話である。真護の眼は服装でも体系でもなく、女性の顔に向かっていたのだから。

真っ赤な、夕焼けのようなポニーテール。同色の猫目。体形通り細目の顔。

美人。総定義してもまるで問題のない女性である。

真護は萌花が近くににいるせいで“可愛い”と称される人間には体勢がある。クラスメイトがアイドルの写真集を持ってきても、萌花の方が可愛いなと思ってしまうほど。

しかし目の前の女性には、そんな言葉で一蹴できない魅力があった。

勿論萌花をないがしろにしている訳ではない。しかし、萌花には勝ち目はない。そう思ってしまっほどの美人であった。

「？ おい坊や。私の話を聞いているのか？ 年上の女性に話しかけられて、何も返さない

というのは如何な物かと思うぞ」

「え、あ、すいません！」

いつの間にか顔を覗き込んできていた女性に動揺しながらも、真護は慌てて頭を下げる。女性の方ばかりかいかいのつもりで言ったように、気にしないと云う風に笑顔を作った。

「構わないよ。それで？ 君はここで何をしていたんだい？ まさか、装備も何もなしで旅人という訳じゃないだろう？」

女性の言葉に、信吾は何も言えなくなる。

自分の事情を話すのは簡単だろう。前の世界で死んで、この砂漠のど真ん中で生き返りました。等と話せば、狂人扱いされる事だろう。

しかしそんな事を考えていた真護の代わりにように、フギンが口を開く。

『相棒の名前は真護。俺の名前はフギン。』

相棒は、俗にいるく渡世者トモシヤ>と呼ばれる人間だね。もっとも、その中でもかなり異質ではあるがな』

フギンの淡々とした言葉に、女性は一瞬驚きの表情を浮かべるもすぐに別の表情を浮かべる。

その表情に、真護が心当たりがあった。

ああ、この表情は萌花が面白い物を見つけた時と同じ表情だ。

「ほう、インテリジェント・アーティファクト有智魔法具か。しかもかなり知恵があるように見える。

おまけに<渡世者>か。興味深いな」

腕を組み、右手は顎に添えて相槌を打つ女性。まさに考える人そのものである。しかし真護は先ほどの表情にあまり良い思い出がなためか、戦々恐々といった雰囲気である。

「そうだな。君達、私の住んでいる村に来ないか？　ここからそう遠くないし、特に坊やは走りつかれているだろう。私の家で休んで行くと良い」

これに乗るべきか、乗らざるべきか。

本来なら諸手を挙げて付いていく所だが、今の真護の精神状態を鑑みるにそんな安易な行動はとれない。

本能的に、萌花「目の前の女性のイメージを拭いきれないからだろう。」

『相棒。どうせここに居たって何が出来るってもんじゃねえ。村があるってんだから、お邪魔しようじゃねえか』

「……しようがないか。フギンは充てにならないしな」

こんな砂漠のど真ん中。例え女性の誘いを断ったとしても、真護を待っているのは砂以外に存在しない。自分は干からびる運命しか持ち合わせていないのだ。

ならば、この誘いはまさに僥倖だろう。例えそれが、獅子の住処であつたとしても。

『そうそう……ん？　待てよ相棒！　充てにならないとは酷い言い草じゃねえか！』

「実際、お前が役に立ってるか？」

村の位置、解らない。

方角、解らない。

唯一分かっていたのは遍く喰らう蟲イト・ワームの情報だけで、それを知っても恐怖以外の感情が浮かんでこなかった。

『……………すいませんでした』

もしフギンに実態が合ったならば、見事な土下座を披露していた位に申し訳なさそうな声であった。

村。まさに、村である。

真護のイメージに合わせるならば、中東の村であろう。

砂を塗り固めて作られた家、様々な物が売られている店、そしてそれほど多くもない人。

それもそうだろう。村を見た限りでは、せいぜい世帯数は50もいかなないように見えた。あまり活気がないのもそのせいだろう。

だが、温かみは感じられる。

道行く人々はお互いに挨拶をして、穏やかな笑顔をしている。

「なんか、良い場所ですね」

社交辞令でもなく、紛れもなく、真護の本音である。

日本という国は国民性もあって比較的優しい国ではあるが、しかし果たしてこれほど温かみがある国であろうか。少なくとも首都東京は、地方からきた人間からすれば冷め切った街という評価を与えられるであろうし、実際真護もそう思う。

真護からすれば、この村の暖かさは心地いい場所であるのは確かだった。

しかし、連れてきた本人である女性は、苦笑いを浮かべる。

「それだけが取り柄というだけの話さ。自分達で食物や物品を作っても、それが村全部を網羅出来るわけではない。結局、大きな街や国の中枢に願い請わなければ生きていけない。脆弱な村だ」

「そんな事、ないです。この村はきっと、大きな街よりもずっと強いんじゃないですか？」

人との絆や仲間意識。これは、軽視されるべきものではない。むしろ大きな街や都市にはない連帯感がある。それがある事できっと、不測の事態が起こっても乗り越えられる力になるだろう。少なくとも真護は、そう思っていた。

「……君は、中々面白い発想をするね。まあ、そうゆう意味では私

も同意しよう」「

一瞬だけ女性は驚いたような顔をするが、すぐに笑顔で真護に答えた。

不思議な人物。

それが、真護を村に連れてきた女性　ラミア・グラーファウゼン自身が、真護という正体不明の人物に抱いた第一印象である。
そもそも<渡世者>であり、しかも最初から有智魔道具インテリジェント・アーティファクトを持っているのが一番気になる所である。

<渡世者トヤシヤ>。簡単に言ってしまうば、この世界で生まれた存在でない者。異世界の存在。とは言っても、この世界では珍しいとは言われるまでも異例だと言われる程ではない。

異世界の生物をこちらに呼ぶ事も可能ではある。だが、ここまでこちらの人間と近い姿をとっているのは稀であるのは確かだ。

もう一つ。インテリジェント・デバイス有智魔道具。これははっきり言ってしまうば「人間と寸分たがわないコミュニケーション能力を持った魔道具」である。これもまた、珍しくはあるが異例ではない。様々な方法で模索されたそれは、その物についている精霊であったり、物そのものに人格を与えたり様々な物だ。

異例ではない。しかし滅多に手に入るような物でも見つかる物で

もない。

おそらく、魔術に詳しいラミアだったからこそ知っているが、村人で知っている人間はいないのだろう。

変わった存在であるのは確かだ。

まだ目の前の青年とも少年とも言えない人物は、確かにこの世界では変わっている存在だろう。

しかし、ラミアは変わっている事に慣れている。

昔共に旅をした仲間は、皆変わった人物ではあった。自分自身は変わっていると自負している。別にそれを嫌煙するような事は絶対にしない。

だからこそ、目の前で楽しそうに歩いている彼を村に招待した。

(もしくは 彼と同じような眼をしているような気がする、からかな)

旅をしていた時のリーダーである彼も、また同じ眼をしていた気がする。

目の前に何があっても、平然と自分らしく生きていける意思の力と言えば良いだろうか。危なっかしい眼であると同時に、どこか信用したくなる眼をしていた。

直観だ。

それ以上でもそれ以下でもない。第六感と言っても過言ではないだろう。

人をそんな理由で信用するのはいけない事かもしれないが、しかしそれに賭けて悪い事になった事はない。

感も勘も鋭いほうなのだ、ラミアは。

「 どうなるか。楽しみだな 」

起？（後書き）

4月16日 / 本文編集
4月30日 / 本文編集

起？

「……凄い、大きいです」

少なくとも、真護から見ればその家は　大きかった。

他の家とも比べた結果でもあるが、しかし現実の価値観を併用した所で女性が案内してくれた家が大きいのは確かだった。

屋敷と言っても、間違いではないだろう。

玄関も玄関と言うよりも“門”と言った方がきつと正しいし、見てみればこの土地の性質のせいか庭というよりも空き地と言っても良いかもしれない庭が存在する。

一人で済むにはあまりに大きな屋敷だった。

「この村で、昔色々あってね。そのお礼と言われて、この屋敷を買ったんだ。まあ、持て余しているのは確かだがね」

「そりゃあ持て余すでしょうね」

自分でも、これは持て余すだろう。

現実で一般家庭に住んでいる奴は、全員持て余すと思う。

『すげえ、姉ちゃん金持ちか？』

「それなりの資産を持つているのは確かだな。昔はそれこそ、色々やって金も稼いだ。もっとも、リーダーの主義の所為で殆ど無賃労働が多かったがな。今の資産は、仲間と旅をしたあと作った物だ」
「それなりって……」

確かに、真護も目の前の女性がただ者ではないと思っていたが、こんな家を持つているお金持ちだったとは。

家の中も、さも豪華なのかもしれない。

大悟の家で少し慣れてしまっているとはいえ、しかしここは異世界である。きつと現実とは変わった物になっているのだと思った。

「……持て余している、ねえ」

しかし、中に招き入れられると、そこには異質な場所が広がっていた。

本の山というのを真護はあまり見た事はなかったが、そもそもそんな事をする人間が少ない。本棚に収まらないレベルの量の本というのも見た事はない。

しかし目の前には、本の山どころか山脈が築かれつつあった。大様々な本が連なっている。中国では、山脈とは龍の死体が連なっているからと言っているが、この本の山脈もまた、どこか龍を思わせるものだった。

……いや、そんな大層ものではないのだが。

「ふむ、すまん。客を呼ぶという事も滅多にないのでね。散らかり放題だ、勘弁してくれ」

「いやいや、散らかっているってレベルの話じゃないのは確かですよ。俺からすれば、かなりヤバいですって」

真護はガサツに見えるかもしれないが、かなりの綺麗好きである。

もつとも、性格からか適当な祖父とガサツの権化のような萌花の所為なのだ。

流石に他人の家なので手を出す気にはなれないが、これでは座る場所すらない状況である。

だが、それでも女性性は、

「ああ、……そうだ。お茶でも入れて来よう。こんな砂漠のど真ん中だが、しかしお茶だけは美味しいからな」

などとまるで話を逸らすように、台所へと、思われる場所へと姿を消していった。

……美人で頭がよさそうではあるが、そうゆう女性に限ってこつゆう欠点があるのか。いや、どちらかと言えば長所が良すぎて、欠点が露骨に見えていると言っべきだろう。

信吾は流石に何も言えず、大きく溜息をついた。

「俺の周りには、ああゆう女性しかいないのかな。萌花だけを対象にするのも、何とも情けないがな」

「ハッ、ハッ、ハア！！ 相棒は自分で気づいていないんだろうがかなり変わりもんだからなあ。類は友を呼ぶつてのはまさにこの事だ」

先ほどまで黙っていたフギンが、いきなり喋り出した。

「唐突だな。つつか、お前が俺の何を知ってるつうんだ」

つい数時間前に出会ったばかりなのだから。

しかし、フギンはさらに楽しそうに（見えるだけだが）している。

「ハッ！ 俺はお前さんの事は大抵解っているつもりだぜ。あの爺

さんから、お前さんが生まれた時からこっちに来るまでの状況は全て教えてもらったからな!」

「……あのジジイ、余計な事しかしねえな」

真護はフギンの言葉に、小さく舌打ちをする。

過去というのは自分で語るから重いのであって、他人に話されれば安っぽい喜劇に早変わりする。第一、真護は自分の過去を語る気はなかった。

過去は過去。元の世界の話あそこを今ここいる世界で話したとしても意味などないのだ。

精々、自分で思い出す程度の事で構わないのだ。

誰とも話す気はない

『……帰れない事を再確認するのは、そんなに嫌か?』

「……嫌って訳じゃ、ないんだけどさあ」

嘘だ。真護には珍しく、大嘘だ。

再確認したくない。自分が暮らしていた場所に帰れないというのを再認識するのは、想像以上に辛い。

納得して、ここに来たはずだったのに。

遠くで萌花と大悟の幸せを願うだけで、充分だった。

(はず、なんだけどなあ〜)

真護は、自然と天井を見上げる。土で出来ている天井は、シミや何かがちらほら見える。

心なしか、真護が暮らしていた家の天井に少し似ているような気がする。真護の家は、工場と並んで出来ていたので鉄骨がそのまま出ているような不細工な天井で、とてもこの天井と似ている要素はないはずなのに。

それが幻視される。

『……相棒よお。俺は相棒の事を“情報”でしかしらねえ。相棒がその時どんな心持ちだったのかなんて言うのは、予想は出来るが理解は出来ねえ』

フギンは、ポツリとそんな事を言い始めた。

あまりにも自然に、物であるはずのフギンは感情をこめて真護に言葉を伝える。

『俺は、まだ相棒の“相棒”になつたばっかだ。正直、俺も相棒も心なんざ開けねえだろっさ。でもよお、

それでも、泣いてんのを見守ってやるくらいは、出来るんだぜ』

「あ、」

敵わない、なあ。

おもわず、そんな事を思った。

思っただけで、眼が熱くなって、涙がこぼれてくる。

「わりい」

『悪くなんざねえ。人間、どんなに信念持ってたって、どんなに納

得したつて。悲しいもんは、悲しいんだからよ』

涙を必死に拭いながら言った真護の言葉に、フギンはただそう言うだけだった。

「さて。お涙ちようだいの演劇が終了したし、君の座れる場所も確保した。これで、話を進められるわけだ。いやはや、私も感動して涙が出そうだった。」

まあ、結局出なかった訳だが」

「……ああ、はいはい解ってましたよ。何であんな長時間貴女が来なかった理由がようやくわかりましたよ！」

真護は。ソファアよりも少し低めのテーブルを間にはさんで立っている女性のニヤニヤ顔を睨みつける。

あの後数分だけだが、真護は泣いていた。もしかしたら前の世界でも、これほど泣いた事はないのではないかと言うほど泣いた。泣いたのだが……しかしそれを、彼女はニヤニヤしながら覗いていたんだ。

看過できる訳がない。というかそもそも、自分の座る場所を確保したのは真護自身だ。

それこそ今も表情に出しているニヤニヤ顔をしながら、真護に指示して本をどかさせたのだ。

ようやく理解出来た。

何故、萌花に似ているなんて印象を受けたのか。

目の前の女性は、萌花と同じく。根っからの女王様体質で、人を弄って弄って弄り倒して初めて享樂を得られる人物だったのだ。最悪な人間と出会ってしまった。

『まあまあ相棒、良いじゃねえか。そりゃあ、あれだよ。男の泣き顔ってのはちよつと恥ずかしいもんがあるが、これで姉ちゃんともちゃんと打ち解けたじゃねえか。コミュニケーションの一環とでも思えばいいのさ』

「そう言うお前はお前で！ 絶対気づいてただろう！ 陰からあの人が見ているの、絶対気づいてただろう！！」

真護がそう言うと、フギンはニヤツつと笑った（気がした）。

『何言ってるんだ相棒 面白そうだったから放置しておいたなんて、全然そんな事ないぜ！』

「おっし今白状したなお前！！」

いきなり相棒だと言う奴に裏切られた気持ちになった。

そんな会話を見て女性も笑いを必死に堪えていたようだが、何とか治まったのだろう。真面目な表情になり、真護達に注意を呼び掛けさせるために手を鳴らした。

「お喋りはこれ位にして 本題に入ろう。まず自己紹介を。いつでも君と貴女では気持ち悪いだろうしな。

私の名前は、ラミア・グラーファウゼン。一応、魔導師なる者で

あり、それなりに経験を積んだ戦闘面における熟練者サヘテランでもある。もつとも、君はこちらの世界に渡って来たのだから、知らなくても構わない」

先ほどまでの女性　ラミアの雰囲気とはあまりに違い、どこか礼儀作法に通じた挨拶をしてくるので、真護も驚きながらも姿勢を正した。

「え、ええっと、俺の名前は川島真護って言います。名前が真護で、名字が川島。一応、向こうでは学生でした」

『遅ればせながら俺も　【思考】を司りし「インテリジエント・アーティファクト有智魔道具」。フギンという』

ラミアは真護とフギンが言い終わるのを待ってから、

「シンゴ君」

真護の方を呼び差し、

「フギン君、だな。はっきりと記憶した」

真護の胸元にあるフギンを指さしてそう言った。

「ふむ。では、何から講義すれば良いのだろうか。君達　特に、シンゴ君は何もこの世界については知らないだろう」

「まあ、ちょっと前に来たばかりでしたからねえ」

あの白い老人からも、何も説明がなかった。

この世界が一体どうゆう地形で、どんな法則があるかも知らない。

そう言つと、ラミアは少し困つたような顔をして首をかしげた。

「全てを教えると言う事はこの場では難しいだろうな……そうだな。歴史とこの世最低限の地理と世界情勢だけでも説明する事にしよう」

少なくとも、それは簡単に説明できる物ではない気がするが、そこを否定してしまうと話が始まらないので、そこは黙って置いた。

「では、この世界はまず 勇者と魔王がいた」

「はあ……はい!？」

いきなりの言葉に、真護は思わず立ち上がってしまう。

勇者!？

魔王!？

普段ゲームや漫画、ライトノベルで登場している名称だ。真護だつて知っている。

勇者 正義の味方の代表のようなもので、勧善懲悪で言う所の“善”が多い。

魔王 悪役でも必ずその悪の集団の頂点で、勧善懲悪で言う所の“悪”だ。

そんな存在が この世界に、いる。まさに、異世界らしい話であつたので、真護は立ちあがつた体勢のまま立ち尽くしてしまう。

「そんなに驚く事かね? 君の世界にも、英雄譚や神話と言う物は

少なくないだろう。それに似た物が現実として存在する。それだけの話だよ」

「それだけと納得できれば苦労はしないですけど……」

実際、戸惑うのもしようがない事だろう。魔物と呼べるような化け物が平気で大地を跋扈し、さらに勇者と魔王なんて二次元的な存在も平気で存在する。こんな事実を突きつけられれば、それこそ本当に異世界にいるんだなと実感してしまう。

実感していなかった訳ではないが、しかしここまでストレートだといっそ清々しささえもある。

「まあ、とりあえず座りたまえ。そのままでは、講義もまともに出来ないだろう?」

「ああ、はい、すみません」

ラミアの少し語気が強い言葉に、真護はそのまま従ってしまった。どうにもラミアからは、逆らう事をためらうような強さが見え隠れしている。宛ら、強面の先生や祖父と似たような覇気というか、……そこは真護の感覚でしかないのだが。

それを見ると、ラミアはうむ、と小さくうなづいた。

「話を続けよう。」

この世界には、大きく分けて三つの生物が存在する。

獣種、人種、龍種。さらに分類を細かくすれば、獣種、人種はさらに二つに分かれ、獣種と亜獣種。そして人種と魔人種と分類されている。龍種の場合は最上位龍と上位竜、下位竜と別れている。まあ、数えれば全八種と言っても良いだろう」

「亜獣種って、攻撃してきたアレ、ですよね」

遍く喰らう蟲イト・ワームの気持ち悪い外見を思い出して、真護は顔をしかめる。あのような存在が、他にも色々いると言うのだ。勿論、気持ち悪い物ばかりでないのは理解しているが……それでも、気持ち悪い事に変わりはない。

「ああ、あれも亜獣種に分類される。そもそも亜獣種というのは、獣種が魔力を持ち、突然変異を起こした獣種が繁殖をし生まれた存在だ。起源はかなり古くなってしまいがね。」

人種魔人種の違いだが、これは外見的特徴と魔力保有量の違いだな。魔人種は肌が浅黒く、耳が私達人種よりも尖っている。眼は紅く、皆体格に恵まれているようだ。

そして人種の何十倍もの魔力を個人が保有している。勿論、あちらも個人差が存在するようだがね。人間からすれば、彼らは脅威にかなりえない。

さらに、龍種というのは名の通り“龍”であり“竜”だ。人側と魔人側。それぞれに一頭ずつの最上位龍が存在し、様々な種類の上位竜と下位竜が存在する。物に寄っては、人が乗れる下位竜も存在する」

そこで一旦言葉を止め、ラミアは眼の前に置いてあったお茶に口を付ける。

真護も先ほど飲んでみたのだが、尋常でないほど苦い。ブラックコーヒーも苦かったがあの比ではない。それこそ舌がしばらく使えない物にならなかった程の苦味である。

良くあんな物が飲めるな、等と思いつつながら信吾はそれを見ていた。

「ふう……人種である我々と、魔人種であった彼らは長い戦を続けてきた。古文書や歴史書を探してみれば、今から約千年前から。人種と魔人種の戦は続いていた」

「“いた”って事は、もう戦争はないんですか？」

真護はそう言つと、ラミアは少し嬉しそうにほほ笑んだ。

「頭が悪いわけではなさそうだな。少なくとも察しは良い。その通り。そこで、ようやく勇者と魔王が現れるのだ。」

戦争も終盤と言う頃には、バラバラだった魔人の軍団は一つにまとまり、“魔王”が統治するようになっていた。人にはそのようなタイミングも力も無かったので、五つの国が合わさって“連合”という集合体として戦っていたのだが、どうにもその時は魔王軍の方が強かった。魔人達に負けてしまうのではないか。そう思う事すらあつたよ

しかし、そこで現れたのが 勇者だ。お前と同じように、異世界から渡つて来た」

「異世界から！ 俺と同じ!？」

真護はその言葉を聞いて、思わず身を乗り出す。

自分と同じ世界からやってきた人間が、この世界にもいるのか！ そんな希望が芽生えたのだ。

しかし、ラミアは首を振った。

「いや、それは正直に言つてしまえば、解らないんだ。勇者本人は自分の元の世界の話をする事を極端に避けていてね。結局、どうゆう世界だったのかは解らずじまいだった。」

だから、勇者とシンゴ君が同じ世界から来た、というのは断言できない。申し訳ないがね」

「そう、ですか……」

真護は少し残念そうに、ソファアの背凭れに体重を預ける。

……辛くないわけではない。だが、世の中はそう簡単にはいかな

いモノだ。先ほども言っていたが、元の世界への未練は真護にはないのだ。

ただ自分と同じ境遇の人間がいれば、少しはこの世界でも楽になるかもしれない。そう思っていたのだ。

『心配すんな、相棒。さつきまで空気になりかけてたが、しかし相棒には俺、フギンという最高のパートナーがいるわけだし、そんなに悲しまなくたって構わねえじゃねえか。そんな事でいじけてる相棒よりも、おりゃあ呑気に笑っている相棒の方が良いがねえ』

先ほどまでラミアの講義を邪魔しないようにと言う配慮だったのか、黙っていたフギンは怒涛の如く喋り出した。

否、これはきつとフギンのいつも通りの喋りなのだろう。短い時間の付き合いではあるが、真護にはそれが自分に対しての気遣いなのだと解っている。

(……心配、させまくりだな)

自分が情けなく思う。

苦笑しながらもすっかりと笑顔を作る。相棒と呼んでくれるフギンに心配をかけないように。

「サンキューな、相棒」

『……へ、礼なんざいらねえや。俺もきつと、相棒に救われる時があるだろう。これで貸し1とでもしておいてくれ。そのうち、礼じやなくてもっと別のもんで返して貰うからよ』

「……一言、余計だけどな」

そう言いながら笑いあうと、ラミアも美つしょうを浮かべながら「講義を続けても構わないかな？」と返してきたので、今度は真護

もしつかりと姿勢を正す。

「では、話を戻そう。」

勇者はこの世界にやって来てから、この世界で戦った。勿論、最初はごく普通の一般人とそう変わらなかつたのだがな。メキメキと頭角を現し、仲間を作り、最終的には『勇者とその五人の仲間達だけでも、魔人軍一万とも互角に渡り合えるだろう』と言われる程の精鋭になったのだ」

「それだけ聞くと、随分強そうですね。何か、人間である事も疑いそうな気がします」

一万人の、しかも普通の人間よりもおそらく強いのであろう魔人達を相手に戦ったのだ。

それはもう、一個人、否、一少数集団であつたとしても出来る事ではないし、出来る事がおかしいのだ。その時点で、勇者の仲間たちも勇者本人も、人間と言う範疇にはおさまっていなかつたのだらう。

よくよく考えてみれば、真護の世界であるゲームでも、勇者はたつた四人で魔王と戦つたりする事もあるのだ。

だが、所詮は物語の中である。現実で適用されるべき事ではない。しかし、それが適用されているのだ。

真護であるならば、恐怖しか感じない。

「……まあ、私が否定するのもなんだから、その言葉は流しておこう。」

とにかく人の軍勢の勢いは増し、魔人軍を倒していった。そして、勇者は魔王を倒したのが、今から十年前の話だよ。これで、ハツピ―エンドだ」

「はい？ そんなに簡単で良いんですか？」

先ほどまでの話の流れでこの先も長くなると思っていたので、思わず聞いてしまった。

「いや、細かく話せばまだまだあるのだがね。これ以上話すと時間がかかってしまう。それでも構わないのであれば話すが？ 明日の朝に終わるかどうかだが」

「全力でお断りさせていただきます！」

思わず土下座しそうになってしまった。

大悟の「我が家系の歴史」を聞かされた時も、確か丸一日使用した。そんな話に付き合わせられれば、大悟の時の様に衰弱を起こして倒れかねない。

「そう言うなら良いがね。では、そろそろこの世界全体の話をしよう」

ラミアは本の山の中から、山を崩さず起用に一枚の紙を取り出す。真護はよく崩れなかったなと思いつつもその紙を見ると、元の世界で見っていた真っ白な紙と違い、あまり見慣れないような少し茶色の紙だ。おまけに、手にとってみれば少しデコボコしているような気もした。

『おそらく、羊皮紙だろうな。この世界の文化レベルは、相棒の世界で言えば中世に近い。国にもよるが、ここら辺じゃ上質な紙なんて高価な品は出ねえ』

「へえ、これが……」

物語の中か、歴史の授業でしか聞いた事がない。実物なんて見た事すらないような物なので、真護は繁々とそれを見つめた。

どうやら、地図のようである。開いてみると、そこには東西南北

を表す記号と、地図なのだろう。大きな大陸が描かれているのが見えた。

「それが、この世界だ」

「へえ〜……え？ この大陸だけですか!？」

ラミアの言葉に一瞬だけ適当に頷きかけたが、驚いて真護は顔を上げた。

「君の世界がいつたいどうなっているのかは不明だが、しかしこの世界で“世界”と呼称出来るのはこの大陸のみだよ。大戦が終わった後に調査団が動いたのだが、他は海が続くばかりだったらしいしな」

「……でも、世界は球、なんですよね」

「ああ、球体という意味なのであるならばその通りだよ。この世界は、球体の形を取っている。ただ単純に、陸という場所そのものがこの大陸しかないという意味さ」

なるほど、と真護は納得する。もしかしたら、そうゆう可能性もあるかもしれない。

授業で聞いた話（うる覚えではあるが）では、地球も大昔には一つの巨大な大陸で、それが移動して真護がいた時のように様々な大陸が点在していた。

この世界は、そうゆう大陸移動が起こらなかったのだろう。そう思って、真護は再度その地図を見る。

「……？」

「どうした？ 何か不都合でもあるか？」

「いや……何か、この大陸半分だけしか描かれていませんよ」

大きな大陸は、どれくらいの尺度なのかはさて置きとして感覚としては、ユーラシア大陸に近い形をしている。

それが東西の境。つまり、北から南でちょうど真つ二つに分かれている。

東側には区切りが五つ。おそらく、先ほど言っていた人の国達なのだろう。そして西側は、真つ黒に塗りつぶされている。ただその黒塗りの真ん中に 魔界 と白抜きで書かれているだけだ。

「見て解る通り、東側が人界と呼ばれる五つの国。そして反対側の黒く描かれているのは、魔界。戦争が終わっても、魔界は未だに魔人種や凶暴な亜獣種の坩堝でな。探索が出来ていないし、魔人の支配制度というのもよくわかっていない。もしかしたら新たな魔王が現れる可能性もあるし、まだ開拓は出来ていないんだよ。」

「だから、この反対側は真つ黒なんですね」

未開拓と言うか、ただ危険で行けないと言うだけの話ではあったが、しかしそこを簡単に言うのには当事者である真護が言う事ではない。

「ここまでが、この世界の粗筋というものだよ。現在の世界情勢や細かい話はあるが、それは別の機会にしよう。話が長くなってしまうし、止めておこう。」

そんな事より……この話とは別の、本当に大事な事を放さなければいけない」

「大事な、話？」

真護は首をかしげる。

何か大事な話があっただろうか。今のところ真護からしてみれば、この世界を知る事以外に、大事な事は特に何もなかったはずだが。そんな態度に、ラミアは呆れたような表情をする。

「はあ……君は、これからどうするつもりなんだい。金もない、行く当てもないだろう」

「ああ!？」

思い出した。

ここは、真護の世界とは違う。全くの異世界なのだ。そんな中でどうやって生きていこうと思っていたのか。

行く当てどころか、この世界での経歴だってないのだ。仕事一つ探す事も出来ないし、大きな街に行けば仕事を探せるのだろうが、そもそもそこまで行く金がない。

「気づいていなかったのかね……」

「いや、流石にそこまで……他の事で頭いっぱい」

『まあ、色々情報が必要だったからなあ。実際、これからの生活を考える余裕なんてなかっただろうさ。もっとも、考えたとしても何か解決策があるわけじゃねえけどなあ！ アハハハハハ!』

胸元で大爆笑しているフギンを首から外し、睨みつける。

いっそ、こいつを売ってしまおうか。インテリジェント……正式名称は忘れてしまったが、しかし珍しい物である事はフギンやラミアの良い事で真護も察していた。

路銀の足しに位なるんじゃないか。

煩いし、テンション高いし。

「……本気で売ろうかな」

案外良い案かもしれない。

『おいおい相棒！ 何か怖い事考えてない!？ 俺に害があるよう

な怖い事考えてないか!?!」

「考えてない考えてない……大丈夫。お前を受け入れてくれる新しい持ち主だっけきつといるさ」

『考えてんじゃねえか!?!』

……これ位にしておこう。別に本当に売ろうとは思わないが、真護が困ったらフギンも困るのだ。それを笑うのは何事か。

まあ、それだからかってストレスを解消したからと言って、解決策が簡単に見つかるわけではない。これでは先に進む訳がない。

「まあ、そうだろうと思っていた。フギン君の言う通り、君に考える余裕がなかったのは確かだ。しかしシンゴ君。君には考える余裕が生まれた。

そこで、提案がある」

「提案？」

真護が言葉を反復すると、ラミアは頷く。

「ああ、君が 私の教え子になる事だ」

「……随分、いきなりですね」

いや、いきなりと言う訳ではないのだろう。自分で言いながらも、真護は頭の中ではそう思っていた。

はたして真つ赤な紅の他人が、見ず知らずの人間にここまで教え

てくれるだろうか。

悪人ならあり得るだろう。真護を騙して奴隷にする（奴隷が当たり前の世界なのかは解らないが）位の事はするだろう。しかし、目の前のラミアという女性は悪い人間には見えない。

眼を見ればわかる等と自分の判断力を過大評価できる訳ではないが、少なくとも真護が見るにそうゆうのを生業にしている人間には見えなかった。

そしてこの行動がラミアの大いなる善意からなる施しなのかと言われれば、そうだと断言できるほど真護はおぼこい訳ではない。

少なくとも、萌花と似たようなオーラを感じる彼女が、真護にそんな無償の施しをしてくれるわけがない。

「これは、取引のようなものだ」

真護の予想通りの言葉を、ラミアは口にした。

「君は、この世界の常識では計り知れない。文字通り、別の世界の住人だ。そんな人間が口にする意見や情報、あちらの世界の技術や道具などの情報。それは金では買えない“知識”だ。勿論悪用する訳ではないが、魔導師というのは知識の探究者。故にそうゆう禁断の果实には興味がある。」

君は、君の知る限りの知識を私に提供する。

私は、君にこの世界を生きるための知識と技術、事によっては多少の金品をやるう。悪い話ではないと思うのだがね」

ラミアの眼には、先ほどの厳しくも優しそうな教師の眼は存在しない。真護を立派な“交渉相手”として見ている。

真護を一人前の人間として見ていながらも、だからこそ油断をせず隙を見せない。

……これが、大人の貫録と言う物なのだろう。緊張で喉が渴いていくのを感じながら、真護は無理矢理、唾を飲み込む。

「それは、交渉ですか？ それとも、相談。

もしくは、ちょっとした脅迫ですか？」

「何故、そう思うのかね」

「……この状況で俺が断つても、何もメリットないから。

こんなの、勝ちが確定しているようなもんじゃないですか」

真護も馬鹿ではない。

勿論、勉強は出来ない。堂々と言う事ではないのかもしれないが、しかしこれは事実だ。しょうがないと言えば、しょうがない。

だが、それでも話の流れや今の状況を考えれば、こんなのある程度の理解力がある人間には解る。

こんな状況で、断れる訳がない。

自分には、こうゆう選択肢しかないのだ。

別に、悲嘆している訳ではない。むしろラミアは良い人である、と真護は思う。知的好奇心というのも嘘ではないのだろう。

でも、それが本心じゃない。

断言できないが、そう信じたい。

きっと大悟や萌花からすれば「真護は甘い！」というだろう。実際真護本人もそう思う。だがそれでも、人間関係とはまず信用である。

まだ信頼は出来ない。

でも、信用できる人物である事は、普段ちよつと人見知りの気が強い真護でも解る。

「……食事、勿論付けてくれますよね？ 先生？」

真護が静かに言ったその言葉に、ラミアは先ほどまでの真剣な表情は一転する。

「ああ、勿論付けるよ。シンゴ」

どこか、安心したような顔だった。

「ふう。とりあえず、片付けはこの辺で良いだろう」

ラミアは大きなため息をついてから、掃除する前よりもずっと綺麗になったソファーに重力に身を任せて座った。それはどちらかと言えば座ったというよりも「落ちた」という表現の方が正しい気さえする座り方で、普段は勿論こんな事をしない。今は疲れているのだ、これ位の横着は許されるだろう。

外を見れば、もう夜になってから随分時間が立っている。日常の風景としてちゃんと正しく夜は暗くなり、月と星々が輝いている。

街の灯りはかなり少ない。元々裕福な人間と言つのは少数派であるこの村は、火種にするガスや蠟も乏しい。そんな中わざわざ夜に灯りをつけて浪費するくらいならば、夜は眠るのは一番だ。

もっとも、ラミアはそこに該当しないわけだが。

「まさか、主導権を握ったのが私ではなく、彼だとはな。いやはや、恐れ入る」

彼、というのは真護の事である。

川島真護。

彼はラミアとの契約　否、この場合は師弟関係の成立と言うべきだろう　が為された直後の言葉が「それじゃあ、とりあえずこの家中を掃除しましょう」だった。

ラミアはその言葉に一瞬真護が何を言ったかを理解できなかったが、理解できていないラミアを無理矢理立たせ、あれよあれよと言う内に掃除用具を何処からか発掘してきて、家の掃除と整理を始めたのだ。

あれには、ラミアも驚いた。動揺したと言っても良い。

まさか自分の教え子となった者にいきなり、やれあれをしる、やれこれをしる、と命令してくるのだ。今までそれなりの生徒を相手してきたが、恐れ慄く事はあれ、まさか生徒に命令される日が来ようとは、流石に予想できなかった。

「なんだね。渡世者とは皆あれほど横柄な性格だったか？　私を随分こき使ってくれたよ、まったく」

ラミアはまたも大きく溜息をつきながら、天井を見上げる。

しかし綺麗になったものだ。

今まで埃まみれであった天井も床も綺麗に掃き掃除がされ、さらにその上からしっかりと拭き掃除までされた。おかげで筋肉痛だ。

その後、本を大きさを目安に整理し、家の奥に飾られているだけで殆ど使用された事のない本棚に全て納められた。おかげで腰が痛い。

さらに使う家財で、布団や今ラミアが座っているソファアの埃取

りと日干し。唯一のんびり出来る時間だったが、その所為で久しぶりに惰眠というものを貪った。

こんな大騒動は、果たして何年振りだろうか。
少なくとも “カレ” といた時だろう。

「……まったく、驚くほど優秀だ」

あの一時間程度の会話で彼への評価は大分様変わりした。

風変わりな若者で、天真爛漫そう。ちよつと牧歌的な雰囲気すら感じる、普通の若者。もしかしたら、この村で生まれていますと言われても全く違和感がないほど見慣れた若者。

しかし、そうじゃない。

そんな軽い物として見てはいけない。

彼は、賢い。

この世界にはまだ来たばかりの彼だ。知識がないのはしょうがない。だがしかし、その無知に甘んじる事をしない。

おそらく、学ぶ事は嫌いだらう。

そして、判断能力。周りの状況や自分の状況を正しく見る事が出来る能力。その能力というのは当たり前のように思えるかもしれないが、だが大事な物で、この過酷な世界を生き抜く為には重要ものだ。

周囲に危険があるのに、危険に察知しないのは愚か者で。

自分が不利な状況であると認識できない者は、うつけた。

これはきつとどんな世界、どんな場所でも有効な意見だろう。どんなに周囲が安全だろうと、安全ではない状況というのは生きていけば必ずやってくる。

それを察知し、逃げるかもしくは、自分の切り札をしっかりと切つて対応するか。

どちらにせよ、それを察知出来る能力とはある種人間が忘れかけながらも、しかし大事な能力だ。

長くなったが　ラミアが見た限り、真護にはその能力がしつかりと身につけていた。

あの年齢ほどでそれを身につけるといふのは、亜獣種や未だ魔人種がいるこの世界でもまた、珍しい事ではあつた。

持っていないとは、言わないが。

持とうと思つて、持てる物ではない。

「……まあ、そんな事情は別にどうでも良いか」

別段、真護の過去に興味があるわけではない。

真護の知識に興味がないと言ふのは嘘ではないが、しかしそれが本文ではない。

知りたい事はもっと別に、あるのだ。

真護という一個人が、いったいどうゆう道を選ぶのか

教師になる事を引き受けたが、いつまでもここに引きとめておく気はない。引きとめたところで収まる器ではないが、いつかはラミア自身が真護に旅を促すだろう。

その時に、この世界で。

善と悪が、程良く混ざり合い、矛盾しながらも拒否反応を起こさないこの世界で。いったいどうゆう風に彼は生きていき、どういった信念の元生きるのか。

あるいは……もしかしたら、“この世界の真実を知りかねないかもしれない”

「私が見届けよう、カワシマシンゴ。お前の行く末、お前の未来。」

魔導師、ラミア・グラーフアウゼンがしかと見届けよう」

少し楽しそうな笑みを浮かべながら、ラミアは自分の疲れて重い体を起き上がらせる。

まずは食事を作ろう。久しぶりでどうなるか解らないが、これでもラミアは一人暮らし。ある程度の料理は出来る。

真護も、ラミア以上に動いていた。疲れて、空腹であろう。

そう思いながら、ラミアは微笑を浮かべ続ける。

この世界を救った英雄。

【勇者の旅団】。

その中でも勇者の二番手に数えられる最強の【魔弾の射手】。

魔導師、ラミア・グラーフアウゼンは、まだ見ぬ世界の未来の姿に、心躍らせるのであった。

起？（後書き）

4月30日／本文編集

承？

さて、ここで真護は様々な事に後悔していた。

いや、別段あの時の決断を　ラミアという女性と師弟関係の様な物を結んだ事には、何一つ後悔はしない。

ただ、ただである。

「これはないよなあ」

真護が空を見上げると、そこには憎々しいほど輝かしい太陽が存在している。しかも、目の前にはやはり砂漠だ。というか、あの村を一步出れば砂漠なので砂漠と表現するのはもう面倒になって来た。何故、村の中から出ているのか。

その理由は、ラミアさんの指令というか、命令である。

……それでは、何故真護がこんな状況になったのか説明しよう。

ラミアに弟子入りしてから、三日経った。

三日とは短い時間かもしれないが、しかし真護にとっては長い時間だった。

一日は掃除に忙殺されてしまったが、あと二日間はずっとラミアによる検査で潰されたのだ。

検査と言っても、別に体の健康状態を知る“検査”ではない。

この世界には人間の生命力と言うのとは別に、魔力という高エネルギー体が存在する。これは自身の体から出来るものではなくて、人間が呼吸する事によって得られる自然エネルギーを体内で魔力に変換しているらしい。

元々は、自然が発しているエネルギーなのだ。

そしてその魔力は、個人個人で違う。

魔力の性質を大きく分けるならば三つ。

一つ目は量。単純に体内に蓄えられる魔力の総量。

二つ目は錬度。魔力構成の緻密さ。これにより、行使する術の威力が変わってくる。

魔力が多ければ威力が高いと真護は思っていたが、それはラミアによって否定された。

確かに魔力の多さが重要な時もあるが、それはあくまで広域魔術などの広範囲で行われる魔術に限られる。通常の魔術で言うならば、どちらかと言えば錬度の方が重要視される。

もっとも、量は生まれつきであり、錬度は修行次第で成長出来るので、真護の場合の錬度は今現在のと言えば良いだろう。

魔術に寄って、量が優先か錬度が優先か。つまり、使う術に寄って変化するのである。

そして三つ目に、性質。

これは十人十色。量や錬度とは違い、本当にその個人に寄ってその性質は変わってくる。魔力を雷の変換する者もいれば、魔力を発するだけで爆発という現象を引き起こす者もいる。これに寄って、使える術の適性も狭まったりする。

この三つは術を行使する時に知るべき情報である。

だからラミアは、修行をする前に真護の体を調べたのだ。

「君の魔力は、かなり変わった特徴を持っているようだね」

ラミアはカルテのような物を覗き込みながら、小さく溜息をついた。

一方真護は疲れ切っているのだろう。今では埃もなく綺麗になったソファーにへたり込んでいる。

別に体力を使ったわけではないが、魔術的な検査の本質はさておくとして、やっている事は元の世界での医療とまるで変わらない。採血などの様々な検査というのは、動いてなくても消耗するものだ。

「死ぬ。精神的疲労で死ぬよ、これ」

「……そこまでの事をしているつもりは、なかったのだがね」

「ハッ！ まあ相棒は昔も今も健康体。検査っていう状況そのものに慣れてないんだろっさ。もっとも、こんな事で消耗しているように、これからが不安だけどなあ！」

本当は黙ってほしかったが、そんな事をする気力も無い。胸元で騒いでいるフギンを無視して、ソファーでだらける。

「まあ、慣れていないならば仕方がないが……ふむ。君は、魔術師には向いていないようだね。錬度も量も充分過ぎる程あるが、性質がいかにとშიがたい。

まさか、圧縮と解放しか出来ない魔力がこの世に存在するとは」

カルテを覗き込みながら、ラミアは眉をひそめる。

真護の魔力は、本当に変わった物であった。

量は魔人種並み。

錬度は魔術的な修行をしたように高い。

そもそも、魔術と言うのは魔人種の魔法を人間が使えるように変化した術である。だからこそ魔力の量としては、人間よりも魔力の量が多い。

よって、量は魔人種の方が高い。真護は、その量を持っている。

そして同時に、錬度はすでに魔術の心得を身につけている人間と同じような錬度を持っている。

驚きを含むには十分である。

しかし、それも宝の持ち腐れである。

真護の魔力の性質は“解放”と“圧縮”である。

どちらも、魔力的性質の中では珍しくも無いが　しかし、魔導師にその性質をもった人間はいない。少なくとも、両方有している人間はいない。

面倒くさいのだ。

“解放”とは、とどのつまりただ魔力を解放するだけだ。それにより開放している間だけは身体能力と防御力を向上させる。しかし、垂れ流しにしているだけで魔術には向かない。無理矢理それを行うとした人間もいるが、悉く失敗で終わっている。

そして“圧縮”。これは魔導師には案外ポピュラーな性質である。魔力を圧縮すると言う事は、魔力密度を高める事であり、つまりは錬度に繋がる。

魔導師が修行するにあたって行う行動はつまり“圧縮”であるし、それを性質として持っている魔導師は総じて錬度が高い。

しかし、これが魔術の使用に最適かと言われるれば、そう簡単に頷けない。

何せ、圧縮するだけなのだ。魔力の弾丸や大球を生み出すことは可能でも、それ以上の事は出来ない。

「しかもその性質が強すぎる。付加させる程度なら良いんだがね。残念ながら君は、魔導師としては大成できないと見える。

簡単な話、戦士になるのが一番効率が良いな」

「戦士、ですか？　でも、そうゆう職業って魔術出来ない人がなるもんじゃないんですか？」

真護の頭の中には、大悟と昔やったRPGが思い出されていた。

あれも戦士職は魔法と言う物が一切使えなかった。たまに使えるように設定されているゲームもあったが、八割戦士職は魔法を使えない。

肉体と武器で戦う存在なのだ。魔法が使えないように設定されていてもしようがない。

だが真護の言葉に、ラミアは呆れたような顔をする。というか、呆れている。

「……君の中で戦士という職業にどれほど凝り固まった第一印象を持っているか知らないが、しかし戦士という職業が魔法を使えないわけではない。

術式を組む事だけが魔術ではない。術式を展開せずに魔力を操る事も、また魔術。他の学者がどういふかは知らないが、少なくとも一般定義としてはそうなっている」

それでは、魔術を勉強しなければ誰も何もできないではないか。そうラミアは付け加える。

魔術とは、突き詰めれば学問である。初期こそ戦闘用の魔術が多かったとはいえ、今現在は大きな大戦もない。今や魔術とは、学問に近い分野に発展していつている。

しかしこの魔術という学問は学問であるからこそ、限られた人間しか学ぶ事は出来ない。真護の元いた世界とは違い、誰でも勉強が出来るなんて文化は存在しないのだ。

真護からすれば教育は“義務”だが、この世界で言えば、教育は“権利”なのだ。

それ相応の金か地位、もしくは才能を有していなければ出来ない。ならば普段、平民と言われる存在はどうするのか。

魔力は多かれ少なかれ誰にでも存在する。その魔力のみを術式ではなく、感覚で操る。今まではただの技術であったそれも、魔術が学問化すると同時に魔術に認定されたのだ。

よって、平民であつても魔術は行使し、その身に宿る魔力を様々な形で使用するという試みも多くある。

「君は体つきも悪くない。通常魔導師のような固定砲台は向かないだろう。私のように魔術を拳に乗せて放つやり方もあるが、私の魔術は、魔力性質的に向かない。

よって君には 戦士が使用する魔術。通称 戦魔術いくさまじゅつ を会得してもらおう」

「会得つて……そんなに簡単にいきますかねえ」

疲れて出来るだけ黙っていた真護は、ラミアの言葉にどこか疑い深げに答える。

真護は自慢ではないが、武術をたしなんだ事は一切ない。

それは大悟の分野だったし比べられるのも嫌いだったので、まったく手を付けなかつたのである。

もっとも、真護も優等生であつたわけではない。道端で喧嘩することもしょっちゅう、祖父と喧嘩する時もしょっちゅう。

しかしそれは、実戦ではない。命のやり取りではない。あくまで、喧嘩の領域を出ない。

だから、ここに来る前に見た魔物やたまに聞く魔物の話を総合すると、自分にはとても無理なのではないか。そういう結論が出ていた。

「別に今すぐにと言う訳ではない。だからこそ、修行なんだよ。すぐ出来るような人間に、修行も努力も必要ない。私が君に求めるのは熱心さと、求める力にふさわしい努力のみさ。

何、難しい事ではない。戦魔術と言つてはいるが、実際は感覚の問題だ。流派というよりも、自分の戦闘スタイルを魔力が存在することを中心に構築する。まあお題目のようなものだ」

『これこそ、十人十色、千差万別と言う奴さ。魔力を使う戦い方で、

なおかつ自分に合った戦闘スタイルを模索する。それが戦魔術の代名詞なのさ。相棒の魔力性質は“解放”と“圧縮”。これはかなり、戦士としれば有利な性質なんだぜ』

フギンの言葉に、真護は小さくうなづく。

少なくとも説明を聞いた限りでは、確かに自分は戦士職向きなのだろう。魔力性質もそうだが、どうにも立ち止まって遠くから攻撃と言うのは性に合わない。

やはり、自分から攻めていかなければ。

自分の趣味主張とのような物だが、しかしこれが以外と重要である。

第一この世界での生き方を未だに知らない。まだまだラミアに師事を受けるべき存在である。今ここで拒否した所で始まらないだろう。

あまり頭の良くない真護でも。大悟から「真護は萌花ほどではないが、しかし子供っぽい」という評価を与えられるような真護でも。それ位なら、良く解っている。

「……まあ、それで構いません。で、まず何からですか？ やっぱ、座学ですか？」

「ふむ。いや、それでも良いかもしれない。シンゴは自分で言っている程無能ではない。未だ無知ではあるが、それも修正可能だ。

しかし、その前に君にはこの世界の法則と生き残り方を学ぶ必要性がある。その一端が座学ではあるが、その前に戦闘というのは経験が付き物だ」

ラミアはそう言いながら、机の横に置いてあったカバンを持ち出してくる。

酷く大きなリュックサックのようなものだ。しかしその内容量と実際に詰め込んだ量には齟齬があったのか、上部にある収納口から

幾つか棒やら剣つばいやらがはみ出している。

「この中には、君の魔力性質・量・錬度に合わせた武器が多数入っている。この中からその状況に合わせて選んでみてくれ。もっとも、一番大事なのは君の戦闘スタイルを見つけ出しそれに合った武器の模索だ。別にどの状況にどれを使えなどと言う、堅苦しい事は言わん」

「……あの、話急すぎませんか？ 普通はもっとスムーズに話しましょう？」

いきなり長台詞で喋り始め、しかもその間も真護は無理矢理立ち上がらされ、リュックサックを背負わせられている。よくわからない状況だ。

この世界に来た時もそうだったが、別な意味で意味のわからない状況だ。不思議な言いまわしだが、しかしこの場を表現するのにまさに適切な様な気がする。

戸惑う真護に、ラミアはニヤリと笑う。

（ ああ、これは悪い事を考えている時の顔だ ）

三日しか経っていないが、しかし一緒に暮らしているのだ。感情の機微くらいは良く解る。

これは、ラミアが楽しんでる顔だ。しかも、その楽しんでいる事そのものは真護に有害なものばかりだ。

だからこそ、真護からすれば悪魔のスマイルなのだが。

「まあ、差し迫った状況になったら迷わず使え。出来るだけ危険な時は助けるから」

信用は出来なかった。

そして、この砂漠のど真ん中に入るわけでありました、まる。つい数時間前に思い出されたそれに、真護は小さく溜息を吐く。何か起こすという予想は出来ても、何を起こすのかまでは予想していなかった。

まさかそのまま武装を持たせて砂漠のど真ん中に放り出すとは、流石に考えもしなかった。というか、したくはない。したい人間なんてどこにもいないはずだ。

まったく、どうしようもない状況だ。

ラミアは真護をここに連れてきた途端、どこかに行ってしまった。どこかで見えていてくれるのかもしれないが、基本的に助言や助力を求める事は出来ないだろう。それは解る。

「まあ、フギンはいてくれるだけずっとマシかな」

『ここで誰の助けも借りずというのもありなのかも知れねえが、例外的な事でもない限り俺は相棒から離れねえ。なら、ここで一緒にいるのも道理つてもんさ』

「そうゆう考えもあるのは認めるけど……まあ、良いか。それよりも武装のチエックだな」

言いたい事を飲み込んで、背負っていたリュックサックをおろして開ける。

見て愕然とする。それは真護でなくてもだ。

一口に武器と言っても、その種類は様々だ。しかもその武器に属している物でも、違いが出てくる。

剣と言っても、短剣、長剣、双剣、大剣等など。種類があまりにも多いのは確かだ。

リュックサックに入っている武器はあまりにも多い。リュックサックの大きさ自体は真護が背負っても苦痛はない程度の大きさだ。重さも真護にはあまり苦にならなかった。

しかし、その中に入っていた武器は多すぎだ。

本来ならこんなリュックサックに入らないような量だ。しかも目の前で見えている物よりまだ奥があるように見える。

「どんだけ底深いんだよ、このリュック……」

『魔術付与された物品ってのは大抵そうだよ。ピンキリだが、それでもこうやってちよつと異常な物が出来ちまう。これに使われてるのは、重量制限と容量の増大ってところだろう。いっぱい入り尚且つ一定の重さ以上にならない。そうゆう風に来てんのさ』

フギンが偉そうに講釈しているが、正直どうゆう理屈で出来ているのか理解できない。

いや、そもそも“理屈”で説明できるものではないのかもしれない。魔術なんていう元の世界にはなかった技術が使用できるのだ。真護の常識を斜め上に通り過ぎていても、さして意味はない。

その常識というのを打ち破るべく、ラミアを師事しているのだから。

「とりあえず、適当な武器だけ取り出しておくか。俺でも使えそうな奴を」

そう言いながら、リュックサックの中身をあさり始める。

槍や弓は魅力的だが、こうゆうのは実際にやった人間にしか使え

ない。とりあえず、それは却下。

大きな武器でも構わないが、自分の筋力で振りまわせるかどうかわからない。しかも隙が大きいので、却下。

「……結局、ここに落ちつくしかないのかな」

溜息をつきながらもリュックサックから取り出したのは、あまり見た事も無いデザインの剣と短剣二本である。

もつとも剣には、特出すべき点がない。おそらく両刃の剣なのだろうが、鍔もない。柄と刃の根元部分には決して小さくはない穴があいているだけ。おまけに、刃はない。

短剣の方は自分でもよくパソコンや軍事物の映画で見たサバイバルナイフを大きくした印象を受けるデザインで、やはり刃はない。

……形だけで剣と短剣と判断したが、刃がないのはとてつもなく不安だ。

「これは、仕様という奴なんだろうか」

一応短剣二本を腰のベルトに挟み、剣の方を振ってみる。すると、ちよつとだけ黙っていたフギンが笑い始めた。

『ハハハハッ、相棒は全く持って無知の権化だな！』

「……ほう、じゃあ知識豊富なフギン様はこれの使い方が解るんだろうな。この刃のない剣の使い方をよ！

これじゃあ肉のないハンバーガー、寿司ネタの乗ってない寿司と同じなんだよ！ 意味がないの！！」

フギンの言葉に怒りを感じたのか、真護は胸元に怒鳴りつける。

といつても別に顔が届く訳も無く、他人が見ればただ下を向いて怒鳴り散らしているだけにしか見えないが。

そんな真護を見て、フギンは愉快そうに続ける。

『そりゃあ知ってるさ。相棒、俺はお前さんに知識を授けるためにここにいるんだからな。』

その剣はきつと、人間社会じゃ案外普通に出回っている武器でな。人間多かれ少なかれ魔力というものが存在する中で、その魔力をどれだけ長く、かつ有用に用いるかの研究がなされた。それはその研究の一環』

「……まさか、魔力で刃を作るなんていわねえよな」

真護は三日で様々な検査を受けはしたが、それはあくまで検査であって訓練ではない。真護はまだ、魔力の魔の字も知らない。

概要をざっくり説明されただけで、一朝一夕で刃を繕うなどと言う事は無理だと思っっている。

『正確には、魔力で刃を“編む”と言った方が正しいかも知れんな。それに、まああまり難しい事をする訳じゃねえ。魔力を注げば刃は編める。魔術を使わなくてもそうゆう技術を使用できる。それが現在の武器の良い所なのさ』

「魔力を注ぐって言っても……とりあえず、適当にやってみるさ」

剣を正眼に構えてみる。

魔力の出し方は知らないが、だが理論で教えてもらっても真護には解らない。理論を理解出来るような頭はないのだ。

だが、こうゆうのは感覚で理解出来るものだろう。ならば、出来ないはずがない。

何せ感性や感覚といった事にかけては、完璧超人の大病だって野性児だった萌花よりも上だから。

『集中しろ、相棒。魔力は血液。体中を流れてる力。それを感

覚だけで掴め』

「……………」

フギンの言葉が、頭の中で反響しているような錯覚がする。それを無視して、真護は自分の中に入って行く。もしかしたら、本当に自分の意思が体に落ちて言っているんじゃないかと錯覚するほど明確に、だが早く集中していく。

この世界に来て、集中力でも付いたのだろうか。感覚はさておくとして、集中力はあまりないはずだった。しかし、意識は予想よりずっと簡単に体の奥の方に向かっていった。

（ 熱い。俺の熱じゃない、なにか ）

熱を感じる。

一瞬だけ自身の体の熱なのかと思うが、しかしそうではない。何か体の奥。いや、体の隅々まで熱が行きわたっている。その力を近くしようと思っても、その詳細が分からない。木の生命力と見えれば大地の脈動を感じ、それもすぐに太陽の熱と風の勢いを感じる。まるで、自然を混ぜた。まるで、世界そのものを感じる様だった。

有機物も、無機物も。

生き物も、植物も、鉱物でさえも。

全てが混ざっている。この世界に存在する全ての存在の“源”。それがもしかしたら、魔力と言う摩訶不思議な力の定義であるのかもしれない。

（ なるほど、これが魔力ね。後は、どう扱えばいいだけって話か ）

しかし、どうすればいいんだろうか。

今までこんな力を扱ってきた事はないし、自分の世界にそんな力を使っていた人間は見た事がない。

気を使える武術の達人が中国やらにいたりとか、日本にも未だに仙人がいるとかいうのは聞いた事がある程度で、それは本当に噂程度でしかない。信憑性が薄い事この上ない。

だが、真似る事は出来るのではないか。真護はそこで思考する。

漫画で出てきた魔力や気も、今自分の身にある物と似た性質である事が稀にあった。

ならば、発現の方法も似ている物になるのではないか。

(とりあえず、やってみますか)

静かに息を吸い、下っ腹に力をためてみる。

丁度武術用語的に言えば 丹田 と呼ばれる部分だ。昔大悟から聞いた話に寄れば、人間の気という物はそこに溜まっていて、意識を集中させることに寄りその中から気を取りだし、腕あるいは足の内や外に纏わせる事が出来ると言う。

(まずは、抽出……)

イメージは、蛇口。それをイメージして、それを魔力が固まっている部分に突っ込む。あくまでイメージだ。魔力の塊に本当に蛇口を取りつけるわけではないし、それで昨日するのは解らない。所詮、これは自分の理性が構築している部分もある。

しかしイメージが重要な時もある。

それが魔力や魔術の理論としてそぐわなくても構わない。真護がイメージしやすく使いやすい物であれば、何でもいいのだ。

「 流れる 」

まるで金属がぶつかり合ったような音を発しながら、その青い刃は出現した。

まるで剣から生えてくるように力強く生まれ、だがそれははつきりと刃の形をしているものだった。

「出来、たのか？」

『みてえだな。おめでとう、これで魔力の出力の仕方はマスター出来たな。しかし、相棒の作った刃は変わってるな。このタイプの剣は使い手によつて刃の形が変わるが、片刃の刃を作る奴は珍しいぜ』

フギンの言葉に安心しつつも、真護は刃をじつと見つける。

確かに、どうやら片刃の刃になっているようだ。おそらく斬れる部分であろうそこだけ蒼色が濃くなっているのが解る。

あまり反ってはいないし少し刃全体の大きさが根元や柄と合わせて太めだが、紛れも無く見た事がある形をしている。

日本刀。反りがあまりないのを見ると、どちらかと言えば古いタイプの刀。大太刀に似ている気がする。

自分が一番知っている刀剣だ。

「まさか、思い出で編んだのかな、この剣は」

思わず懐かしさに、真護は頬を緩めた。

大悟の家にある古い大太刀を一度だけ見せてもらった事があった。少しカビ臭い土蔵の中で、その太刀だけは妙に綺麗に土蔵の奥底に鎮座していたのが印象に残っていた。

大悟は剣道をしていたが、真護はやった事はない。一度誘われてやったが、どうにも剣道という物には向いていない気がしていたから。

しかし、あの大太刀を見た瞬間に「剣を使いたい」という感情が高鳴ったのを覚えている。

だからだろうか。

刀剣を扱うという思考の中でのイメージで、これが引き出されたのかもしれない。

「これは、さ。この刃の形は、俺の思い出なんだ。向こうに残してきた仲間との、ちよつとした思い出の一つ」

「相棒の思い出、ねえ。」

「……んじゃそれは、きつと相棒の仲間からの餞別って言った所かな」

真護の言葉に反応してか、フギンもどこか嬉しそうだ。

餞別。

「……くれそうな当たりが、やはり大悟と萌花というべき所なのだろうか。そう思いながら、真護も小さく笑う。」

「あいつと一緒に戦えるって言うなら、悪くねえな」

むしろ、心強いと言っても過言ではないだろう。

誰でもない。一緒に遊んで一緒に大人数相手に喧嘩をしてくれた大悟の。しかも、やたら強かった大悟の先祖の持ち物と似ているなら、それは心強いし心地いい。

「……よし、とりあえず解除して、これからどうするか考えよう。」

「……というか、先生は何がさせてえんだ。こんな砂漠の中で、サバイバルでもやれって言うのか？」

刃を維持するために注ぎ込んでいた魔力を切って刃を消し、ベルトの右横にはさむ込む。

周囲を見渡しても三日前と同じように、砂しか見当たらない。ここで修行を行うと言われても、何をすればいいのかも解らない。ここでラミアがいれば聞くのだろうが、しかしラミアはいない。おそらく遠くで真護がうろたえている姿を見てニヤニヤしているだろう。そうゆう性格なのだともう諦めている。そうゆう意味で、きつとしても教えてはくれないだろう。

『ああ、俺は何となく解るぜ。あのラミアって女のやりてえ事がさあ』

「に言葉少なだな。普段のお前だったら弾丸トークだろうに。何か知ってるなら教えてくれ、じゃないとどうしようもないぜ」

言いにくそうにモゴモゴと言葉にしないフギンに、この直射日光でかいた汗を腕で拭う。しかし腕も汗だらけなので、あまり意味はないようで汗は雫になってポタポタと垂れる。

暑い。

魔力を体から引つ張り出す為に集中していたからすっかり忘れていたが、しかし尋常ではないほど暑い。

これでは、数分で干上がってしまうのではないかと思うほどだ。もつとも、そこはラミアも考えていたのだろう。ご丁寧にリュックサックの中には武装の他にも飲み物がパンパンに入った水筒があった。

『……ここ、ガラハ砂漠は砂漠であるがゆえにまともな生物があまりいねえ。しかし亜獣種の類は魔力を持っている。魔力とはつまり生命力で、強弱はあれ劣悪な環境でも生き延びる。

だが、このガラハ砂漠はその劣悪な環境つて中でも一等になりそうな程の物でな。生き残り続ける事が出来る亜獣種も強力なのが増えてくる』

「で、その話がどう続くんだったの。俺はここでどうしたいか知り

「たいんだが、」

『馬鹿野郎、まだ続きがあるんだよ』

珍しく真剣なフギンの言葉に、素直に真護は黙った。しかし、黙ると余計に暑さと渴きが気になってしょうがない。

フギンは話を続ける。

『しかも、この砂漠には亜獣種の餌になるような物が存在しねえ。草木もないもんだが、草食の比較的大人しい亜獣種は来ない。来るのは獰猛で危険な亜獣種たちばかりだ。そいつらは餌の匂いに敏感で、一人で歩いているのを感じすればすぐにやってくる。』

相棒、俺の言葉の意味が解るか？』

「いんや、さっぱりだな。とにかく暑いって事しかわかんねえよ」

真護がぼろとしながら座っていると、不意に真護の上に影が出来て、陽が毛が生まれる。

雲でもあるのか。ならば幸運だ。そう思って後ろを振り返った。

「ハイ？」

思わず呟いた言葉は、少しイントネーションが可笑しかった。

目の前に広がるのは、灰色の毛。おそらく、体毛なのだろう。びっしりと生えたその上には、大きく裂けた様な大きな口に、迫力のある三白眼。さらにその下の足には鋭く、硬そうな爪が四本しっかりと生えている。

犬 否、狼だ。

しかも、普通のその四倍程ありそうな体格の狼が。

想像していなかったと言うべきだろうか。自分はいつまでも神の元で、昔とは想像もしなかった物置き暮らしを永遠に満喫し続けると思っていた。

そう、想像していた。

だが、それは叶いもしなかった。

別にあの物置き（と定義上言っておくが、本当に構造的な意味で“物置き”であったかは不明だ）で永遠に過ごし続けていた等と思っていた訳ではない。しかしだからと言って、乳臭い子供のお守をするというのも、納得がいくわけではなかった。

例え神の命令だったとしても。

元々神が嫌いであったフギンからすれば。人から命令される事そのものが嫌いなフギンからすれば、内容以前に不承不承であったのは確かだが。

だが、その“相棒”になる相手である乳臭い子供 川島真護の人間性を見て、確認して、その考えは一蹴どころか一瞬で消え去った。

（認めよう。相棒は、俺の“相棒”に適している）

異常であり。

異常である。

初めて見た時は、『こんな人間がいて良いのか？』と思わず思っ
てしまう。

真護自身の性格は普通で平凡であるかもしれない。例え異常性があつたとしても、その異常性は元の世界では反映されぬものであるのは確かだ。

もし、こんな事がなければ。

真護が神に選ばれる事がなければ、もしくは死なずに生きていれば。その異常性は異常と感知される事も無く平穩に人生を全う出来ただろう。

だがしかし、そんな“もしも《IF》”は存在しない。

実際のこの世界にやって来てしまったのだから、それはもうどうしようもない。

フギンは今、真護の首にぶら下がっている。

そして真護は今、自身の魔力を手繰り寄せようと必死だ。

（まあ、必死でどうにかできるって時点で、すでに異常ではあるんだがな）

魔力という類は、そんな簡単に、一朝一夕で目覚める物ではない。どんなに才能がある人間でも魔力を見つける事に三日。魔力を取りだす工程でさらに三日かかるものだ。

それはどんな人間でも、魔人種でも変わらない。

それが常識で真理だ。

魔力と言う物は、莫大なエネルギーだ。少ない人間でも、使いこなすようになれば一線級で戦える戦士になれる。元々自然のエネルギーを取りこんだからこそ作りだされているのだ、強力であるのは当然だ。だが、だからこそ体が拒否をする。

本来使わずのエネルギーを無理矢理使おうというのだ、体は拒否反応を起こす。無理に行おうとすれば、一生まともに生きていけない事態に陥ってしまうかもしれない。

だが 真護はそれを行っている。いや、行えていると言い直した方が良さそう。

すでに魔力を見つける事は出来たらしい。今はきつと、出力するためのイメージを構築している。

（凄まじいな。こんな事が出来る体 いや、こんな事が出来る精神がどうかしているぜ）

体が拒否反応を起こすのは勿論のこと。

精神が拒絶反応を起こすことだって存在する。

人間の精神は脆弱で、脆弱であるがゆえに綺麗だ。だからこそ人間には良心という物が作りだせるし、魔人種を一時期凌駕出来たのだって、その精神の綺麗さがあるからこそだ。

だからこそ、魔力に対して人間は脆弱に反応して、簡単に精神は崩壊する。

そんな魔導師が何人もいるのを、フギンは知っている。だが、真護がそうなる予兆はない。むしろ順調だ。順調なのが怖く感じてしまうほど。

(こりゃあ、当たりだな)

当たりも当たり、大当たりかもしれない。

フギンは小さく笑う。おそらく集中していて真護には聞こえないだろうが、それでも気にしているのか小さく笑う。

楽しい。

これほど楽しい存在を見たのはどれほど昔だろうか。

存在も、

力も、

精神すらも、

異常で異常。

そんな存在が生存していることこそむしろ奇跡に感じてしまう。

そんな風にフギンは見ている。

(人間でありながらも、人間としてのナニカを失っている………良いねえ、最高だ!!)

そんな人間だからこそ、フギンに相應しい。

フギンという異常な存在が、相棒と呼ぶにふさわしい。

だから、こんな所で死んでもらっては困る。

もっと、面白い事をしろ。

そして、自分に見せる。

真護という存在がどうなるか。

世界という存在をどうするか。

▣ 俺を楽しませろ、
“相棒” ▣

承？

戦闘、とは何だろう。

人によつては一方的な殲滅戦もまた“戦闘”ではあるし、一方的な退却戦もそれはそれで

“戦闘”なのだろう。状況によつて変化するものの、それはやはり列記とした戦闘であり戦いだ。

しかし、もし極限までその意味を突き詰めるとするならばやはり同じ二字熟語である

“攻防”こそが戦闘であると、戦闘という物を広く理解できている人間には解るだろう。

守つて攻め。
攻めて守る。

それはまさに陰陽のような存在であり、矛盾せず相反せずに存在する。

存在しているからこそ戦闘という状況が成り立つのである。

なのであれば 今の真護の状況というのは、戦闘ではないのか
もしれない。

「うわあああああああ！！」

撤退戦と言うよりは、どちらかと言えば逃亡戦と言った方が良く
かもしれない。

攻めもせず、
守りもせず、

全力全開で逃げているだけである。

『相棒、相棒！ これ修行の趣旨と違ってないか。逃げてるだけだよ。これ、逃げてるだけだよ。』

「いやいや、逃げないと！ これ逃げないと生き残れないから！！」

この炎天下の中全力疾走しながらも、フギンの言葉に答える。

逃げなければ。そもそも、勝てるはずのない。

今後ろで真護を追いかけているのは、外見上は普通の狼のように見える。黒い毛並みに紅く獐猛そうな眼。鋭い爪や牙が見える。それが視界に入るだけで五匹。

別にそれは構わなかった。

狼と言つて凶暴で勝てないようなイメージを持つ人も多いだろうが、しかし大きさは危険

度は大型犬と同じである。武器を持っている真護であれば退けられる事も可能だろう。

だが。

何が怖いかと言えば、その大きさである。

ありえない。

狼なんていうのは、どんなに大きっても一メートル強くらいだ。

どんなに大きっても、実際

際は真護より小さい。

それが、何で小さいのでも二メートル強、大きいのであれば三メートル強の狼が追つて来ているのか。

『ちなみに、あれの名前は雄々ヒリーヴァルクしき大狼。どちらかと言えば、魔力を体の巨大化と筋肉、爪や牙を強化するためだけに使ったまあ、亜獣種としてはそれほど変わった部類じゃねえ。』

ただまあ、あの体格で追いかけたらそりゃあ、怖いよなあ』
「ああそうかい！！　そうやって呑気に解説役やって空気になりや
がれおめえは！！！」

全力で走りながらもフギンの言葉に言い返すあたり、まだ真護に
は余裕があるらしい。

だが、解っている。理解は出来ている。あの雄々ヒリーウルフしき大狼と呼ばれ
る大きい狼と自分の体格差では、この追いかっこは長くは続かな
い。

むしろ、今まだ追いつかれていない事が奇跡と言えるだろう。

「戦って倒すしか、ないのかあ」

むしろ、それしかないとすら言える。

そもそも、これが修行なのだ。さっきフギンが言っていた事が正
しくて、自分がむしろ間
違っている。

でも、それでも、やはり真護が真剣だったとしても。例え戦う事
がこの世界でも必要でも、
怖い。怖い物は、怖い。

『……相棒。そう怖がるもんでもねえよ。むしろ、今の相棒なら、
あの大きいだけの狼は充
分に相手出来る』

そんな真護の心の中を見透かすように、フギンは静かにそう言っ
た。

「そう簡単に言うけど、俺は、」
『解ってるよ。確かに、相棒は戦いつて事に関しての経験はねえ。

平和な世界で生きてきた
相棒だ。せいぜい、道端で同じ歳くらいの連中と喧嘩したくらいの、
経験ともいえねえ経験
だ」

フギンは、いつもよりもはっきりとした口調で話し続ける。

『だが相棒には、前の世界で持っていなかったモノを、今三つ持っ
ている。』

一つは魔力。膨大で強力な魔力が備わっている。今の相棒は、身
体能力が上がってる。こ

れは魔力の覚醒した時にはよく起こる、疑似的なブーストだ。だか
ら今、<ruby><rb>雄々しき大狼</rb><rp>(</rp>><rt>ビ
リーヴルフ</rt><rp></rp>></rp>></ruby>との
追いかけても辛うじて出来る。

二つ、武装。相棒の手には、ラミア姉さんから貰った武器がある。
華麗な戦闘っていうの

は流石に無理があるが、無いよりもずっと良い』

「……三つ目は？」

気づけば走りながらも、フギンの話を黙って聞いていた。

妙に、頭の中が静かだ。というよりも、冷静になったと言えるか
もしれない。フギンの会

話を聞いていると、先ほどまで真護の頭の中で駆け巡っていた熱い
何かが、スツと鳴りを潜
めていた。

フギンが、思ったよりずっと冷静だったからだ。

フギンの解っている事と言えば、常時マシニングトークで冗談の
中身もくだらない事が、

下ネタしかない。そこに能天気な足しても良い。

しかも、真護の首にぶら下がっているこの騒がしい相棒は、真護のように睡眠や食事というものがいらぬ。

つまり、真護が寝ている時であろうと食事をしてる時であろうと、早朝だろうと真夜中

だろうと、そのマシンガントークを遠慮なく発揮している事もしばしばどころか、かなりのタイミングである話だ。

どうしても、そんな相棒がこの世界でも珍しい部類に入っている「有智魔道具」《インテリジェント・アーティファクト》「だと言う事も、名前の由来が【思考】という意味である事も、しっくりとは来ていなかった。

名前負けして、存在負けしている。

だが今この瞬間だけは、正しく「有智魔道具」インテリジェント・アーティファクト

であり、さらに【思考】という名を与えられる存在に、相応しい“モノ”であると、素直に思える。

『三つ』

先ほどまでずっと穏やかだったフギンの声が、

『相棒には、俺がいる』

「……頼りねえな」

真護が思わず吹き出す。

『だが今の相棒、いや、これからの相棒には、俺が必要だ』
「……自信満々だな」

俺がそう言うと、フギンは嬉しそうに笑う。

『ハハハッ！ それが、相棒に手助けすることこそが、今の俺の存在理由で存在意義だ。自信を持たずにどうするんだって話だ！！』

「……そうだな。お前はそれ位が良いかも知れねえ。ちよつとウザいけど」

『ウザい言つな！』

真護の罵りも、フギンの言葉も、内容とは裏腹にかなり明るいものだった。

それはそうだ。こんな楽しい事で、こんな愉快的な事で、嫌い合えるはずがない。もうフギンと真護の関係と言う物は、“相棒”という表現以外に表現できない関係になったのだから。

「んじゃ、サポート頼むぜ！」

柔らかい砂地の中で無理矢理急ブレーキをかけ、無理矢理振り返る。

大狼達は真護に警戒しているのか、同じように止まってこちらを警戒しているようだ。ゆ

っくりと真護の周囲を囲んでいる。

まずは集中すること。

ただ一匹に集中する訳ではない。三匹全部に意識を向ける。ばらばらに思考する訳ではなく、そもそも一匹の動物として認識する。

狼と言う動物は（目の前のコレが狼と呼称しても本当に良いか解らないが）集団を一つとして行動する生き物だ。一匹狼というのは褒め言葉として使われているが、実際の所集団の中でしか生きていけない。

一匹狼とは、紛れも無く死ぬ運命の存在である。

一匹では脆弱だからこそ、ヒリーウルク集団で行動する生き物。

だからこそ、この三匹の雄々しき大狼は五匹ではなく“一匹”と認識するようにする。

『考えるな、感じる』

「……ちよつと待てや。それ、何かのパクリじゃね？ 明らかにパクリだよな？」

『いや、洒落でもパクリでもねえんだよ。相棒は頭が良くねえから、そこら辺は本能の赴くままにやれ』

「……馬鹿にされている気がする」

『馬鹿してんだよ！ こうゆう時は馬鹿な方が良いんだよ！』

こいつ、後で魔力で強化した手で握りつぶそう。

一瞬そう思いつつも、取り合えずその怒りを押し殺して 否、目の前の大狼たちに向ける。

大狼はまだ動いていない。

別に真護を律儀に待っている訳ではなく、ただす気を窺っているから動かないのだ。

正直な話、怖い。恐怖しか感じない。

こんな真護の常識とは外れた存在が、目の前に入る。しかも、真護に敵意を向け、襲おうと牙を剥いている。

普通は、戦えない。そもそも、戦うと言う選択肢が存在しない。本来なら警察や、それでダメなら自衛隊でも呼んでくる場面だ。

だが、この場で、その“普通”は通用しない。
ここは今まで生きてきた世界では、ないのだから

「来いよ、化け物っ！ テメエら倒して 俺はこの世界で生きる
！！」

そう叫んだ瞬間、大狼達が跳躍する。取り囲んだ中心に入る真護に、その巨躯で跳び上がったのだ。

怖い。
怖い怖い怖い！
あんな巨体が、信吾に飛びかかって、

『相棒、前に跳べ！！』

恐怖が広がっていた頭の中に、フギンの声が響いた。そのまま、フギンに言われたとおり前に跳んだ。要領としては、スライディングと同じ。前にまっすぐ。

砂の地表を這うように 真護は跳んだ。

磨!!!

「っ!!」

砂と自分の体が擦れる音を聞きながら着地すると、すぐに体を起こして<ruby><rb>雄々しき大狼</rb></ruby><rb><rp>(</rp><rt>ビリーヴウルフ</rt><rp></rp></ruby></ruby>のいる方向に向き直る。

牙アア　　!!

雄々しき大狼は、ビリーヴウルフ空中で勢いを殺す事も出来ず、真護がいた地点にそ

のまま着地した。

自分の仲間とぶつかり合いながら。

威力なんてない。所詮自分達の勢いで正面衝突しただけで、ダメーじなんて与えられるわけがない。

だが　隙が出来た。

『ボサツとすんな!!』

「　っ!!」

フギンの言葉に従うように、否、実際に従い、剣を握り締めて走る。

一瞬だけ油断した雄々ヒリーウウルフしき大狼達はすぐに状況を理解し、真護を発売する。

無視。今の状況で気付かれるのはしょうがない。ただ突き進む。

牙アアアアアアアア！！

怒りの咆哮を上げる。

無視。そんな事を気にかける暇はない。

まるでスローモーションの中を自分だけが通常のスピードで走っているような感覚がある。

自分だけが、この世界で誰よりも早いと誤解してしまうような。そんな感覚さえある。

『 斬れ！！！』

「 ダアアアアアアアア！！ 」

刹那。

普段であれば人間が近く出来ない、まさに一瞬。フギンの言葉に従って、剣の刃を展開させ、

斬!!!!

自分に向かってくる一匹の大狼の腹を、刃で切り裂いた。

驚くほどあっさり 驚くほどの血を出しながら 驚くほど簡

単に、さっきまでの恐怖

の対象であった雄々ヒリーヴウルフしき大狼は倒れた。

牙ア

ア

すぐに、だ。

内臓と血を垂れ流し、あれほど恐怖した大狼は息絶えた。

気持ち悪く、生温かい血の感触。

それは恐怖と言うよりも 罪悪感。

生き物を殺した。自分を襲ってきた生き物で、殺さなかったら自分が殺されていた。だから、殺すのもしようがない。

だが それが、嫌だ。

そんな当たり前な事で、言ってしまうえば防衛本能で、言ってしまうえば正当防衛なのだけだ。

そんな事が、当たり前前に“良い”なんて思ってしまう自分が、どうしようもなく嫌だ

『次、右！！』
「　　っ！！」

だが、その考えもフギンの声でかき消される。
我武者羅に　ただ無心に。真護はそのまま剣を真横にして、そ
ちらを見ずに突きたてる。

刺！！

牙アアア　　牙、

おそらく、横合いから攻撃しようとしたのだろう。
見るとそこには、自分の剣の刃が顔に突き刺さっている大狼がい
た。

「っ！！」

喉の奥で、小さく悲鳴が鳴った。
なんだ、これ。

これ、いったいなんなんだ。
自分は何か悪い事でもしているのだろうか。
……しているのだろう。一個の生命を奪うとはそうゆう事だ。
それが生きるためであっても、悪いことだ。

悪い事以外の、何なんだろう。

『馬鹿、相棒！』

「え　　だあ！？」

予想できなかった衝撃。

そこまで重くはない真護の体だが、しかし軽い訳でもないその体がいともあっさり吹き飛んだ。

「、武器、」

吹き飛ばされて混乱しながらも、すぐに手探りで武器を探そうとする。しかし、掴めるのは砂ばかりで武器が見つからない。

まさか、あの倒した大狼に突き刺さったまま　　？

それが解った真護は、すぐに腰に差してあるはずの短剣を探った。勿論、あの大きい体格

の雄々ヒリーヴァウルフしき大狼に短剣二本で戦えるとは思っていないが、今の真護は不安だった。

武器を持っていないと、そもそも向かい合う気さえ起きない。だが、

「ない！？」

『ちくしょう！　一番最初にダイビングした時に、落としたのか』

フギンはいる。だが、まるで遠くにでもいるように声がこもって聞こえる。

こんな真護が、目の前の大狼を倒せるか？

（ 無理、だな ）

頭の中で、冷静な自分がそんな事を言う。

無理、だよな。

真護自身も、そう思ってしまう。

自分は何だ？

魔力があっても、

武器があっても、

フギンがいても、

ただの、17歳だ。

牙アアアアアア！！

雄々しき大狼ヒリーヴウルフが咆哮を上げ、鋭い爪を持った腕を振り上げる。まるで

先ほどまで自分が見えていたのと同じように、スローモーションで動いている。

真護を、その爪で引き裂こうとしている。
引き裂く。

人間を引き裂くなんて事が出来るのだろうか　いや、出来るのだろう。あのナイフのよ
うに鋭い爪であれば、真護を引き裂く事などきつと造作も無い。
造作も無く、死ぬ。

先ほど真護が殺した大狼達のように、いともあっさり簡単に。
死ぬ。

人間も含め、動物というのはあまりにも脆い。強固な皮膚を持つた動物もいるだろうが、
しかしその動物達も武器の使い方によっては死ぬ。
死ぬ。

生き物は、簡単に死ぬ。

(……あれ?)

違和感がある。

自分の考えに違和感がある。

そもそも　自分は一度、死んでいるじゃないか。
萌花と大悟を守って。
車に轢かれて、死んでいる。

(……じゃあ、俺が今、怖がってる意味は?)

死を恐怖する、意味は。

意味は、ないんじゃないか。

一度死んでいる身で、死を怖がる必要性がどこにある。

だいたい真護は、萌花や大悟を守って死んだ時に。死ぬ恐怖を感じていたのだろうか。

……いなかった。いたかもしれないが、それは微々たる物だったと思う。

(じゃあ、俺が死を受け入れる価値は？)

死を受け入れる、価値。

それも、ない。価値などまるでない。

ここでただ、のたれ死ぬ。意味どころか、価値すらない。

ここでこうして生きている。生かされている俺。

神と名乗るクソ爺に、カモ何も皆貰って。

生かされている。

いや 生きなきゃ、ダメだ。

「……萌花と、大悟に約束した」

あの二人は、まるで聞いてない。

真護が勝手にいるだけの、勝手な独り言だ。

だが 生きると決めた。

あいつらを思いながら、この世界で生きると決めた。
なら。

「ここで、死んでなんかいらねえんだよ……」

臨

斬！！

「ハア、ハア、ハア」

聞こえてくるのは、真護自身の息遣い。

後は遠くで、鳥が鳴く声。それ以外に何も聞こえない。先ほどまで聞こえていた大狼の息遣いも、咆哮も、足音も、何も聞こえない。

ただ、真護がいるだけ。

真護が 生きているだけ。

「殺した、のか？」

「……そう、みたいだな。」

んで、相棒。その腕のヤツ、なんだ？」

フギンの言葉で、ようやく真護は眼を開けた。

目の前には、喉を突きさされた大狼。正直、見て痛くはない。赤い血が流れ、肉と骨が見

える光景。

だが、そんなモノが大事な訳ではない。

少なくとも 自分の腕に生えている、爪のようなモノが、重要だ。

「何だ、これ、」

思わずそう呟く。

腕を覆うように生えているそれは、先ほど真護が剣で作り出した刃と同じ色合いをしていた。

形状は、爪。

先ほどまで真護を襲おうとしていた大狼の爪の形と同じソレではあるが、しかし大きさはけた外れに違う。まるで鎧のように、自分の腕を覆っているソレ。

「フ、フギン、これ、」

『 正直、俺にも解らねえ。いったい何でそんな形状をしているのか、そもそも武器を通さずにこんなイメージ固定は、相棒には無理なはずだ。』

……相棒、お前いつたい、』

何なんだ。

フギンはそう言おうとしたんだろう。だが言葉は尻すばみになって、途絶えてしまった。

だが例え途絶えなかったとしても、自分でもどうしてこんな物が作れたのか分からない真護自身も、答えられなかっただろう。

(訳、わかんねえ)

そう思った瞬間、蒼い爪はまるで真護の中に溶け込んで行くかのよう消えていく。

同時に、異常なまでの倦怠感が真護の中に重くのしかかってくる。慣れない戦闘。極度の恐怖。そして混乱。そんな中で、今まで立っ

ていられたことこそ、

むしろ奇跡といっても良いだろう。

「あ、」

小さく声を上げながら、真護は、暗い中に意識を手放していた。

“そうじゃ、じゃから、お前は面白い”

最後に、あのクソ忌々しい老人の声を、聞いたような気がした。

異常、異状。それがどういう意味なのか、言葉を作った人間本人でも、正確な者は分かっている。

そもそも、異常とは。そして異状とは、その人間によって別れてしまう。

生魚を食べる習慣がない国からすれば、日本人は異常であるし。神に生贄をささげる習慣がない国からすれば、それを行っている国は異状である。

“異なる”という言葉の内容。

それこそ、その人種。

それこそ、その国家。

それこそ、その世界。

人の数だけ存在する、まさに十人十色。それが異常であり、異状である。

だから真護の思考構造や精神構造を“異状”と称したフギンの考えは、フギンから見れば

異状というだけで、もしかしたらそれを“当たり前”と認識してしまふ者達もいる可能性は捨てきれない。

少なくとも、世界全ての人間を見ていないのだから。

だが、この事に関して 真護が起こした、特異な能力はまさし

く、特異であり。

異常であり。

異状なのだ。

それは実際に目の前で見ていたフギンもそうであるし、遠くからそれを観察していた、
ラミアからしてもそうであった。

「
」

ラミアは、自分の目の前に置いてある温かなお茶を見つめながら、
必死で頭の中を回転させていた。

時間は、すでに夜。あたりはもう暗く、部屋の中も魔力で稼働しているランプを点けなければ真つ暗で、とてもではないが行動は出来ない。

もっとも、今のラミアにそれは不要であるかもしれない。
今必要なのは行動ではなく、思考なのだから。

……真護は今、自分の部屋で熟睡している。

ヒリーヴウルフ
あの雄々しき大狼の集団の襲われ、気絶してからずっと眠り続けていて、ラミアが自宅まで運んで来て、着替えさせ、何とかベットに寝かせたのだ。

「
なんだ、あれは」

だが、その事実もラミアからすれば、今の思考には不要な情報だ。
もっとも必要な情報は、あの、魔力の爪。

あれには驚くというレベルを超え、驚愕という次元も超えてしま
うモノだ。

そもそも、魔力とは固定出来ないものだ。それを固定することこそ
魔術の本質と言えるか

もしないが、現在の人間では　否、魔人種であっても、器具や武器の手助けも無しにあのような事は出来ない。

出来るはずがない。

いくら強力な力と知識を持った魔導師であっても、そんな物質的な補助がない状態で形を強烈にイメージし、魔力にその形を維持させ続けると言うのは無理だ。

果てしない程強靱な精神力と、膨大な程の想像力。異常な程の魔力が必要になつてくるし、それを兼ね備えている者は何万人に一人。いや、もつと確率的には少ないものだ。

しかも素直に“天性の才能”とは言い難いものだ。

「　彼が、渡世者だからか？」

確かに、ラミアの知っている勇者という存在は……自分が天才と呼ばれているのが馬鹿馬鹿しく思えるくらいには、強かった。

だが、それとはどこか異質だ。

勇者の場合は、かなりの力技。別に特別な魔術や技術を使つていた訳ではない、自分の地力と武器に頼つていた面が強い。

だが、真護の場合は　自身が認識していない、技術が存在する。これを真護が自身で認識していて、任意でその能力を行使したと言われれば解る。理解出

来ない話ではないが、納得出来る位の器量は、ラミアの中にも存在する。

……ぜひ実験対象にしたい、とは思うが。

だが、真護自身はその能力の事を全く知らなかったし、事前にラ

ミアに話してもいなかった。

隠していたという事もないわけではないだろうが、しかしこの三日間付き合ってみれば解る。

あの真護が、嘘をつけるはずはない。

妙な所で律儀で真面目。

そこが真護の良い所なのだから。

「……なら、」

なら、なんだ？

ラミアの中で、いくつもの仮説が生み出される。そしてすぐに、自分の中で違うと否定を入れる。脳内で、その思考の回転をただしていくだけ。それがラミアの思考の手順。

昔の仲間達からすれば「考え過ぎ」という一言で片付けられてしまうモノではあったが、しかしラミアからすれば思考こそ人間の本分であると思っっている。

思考しないで行動するだけならば、獣だって出来る。思考することこそ、知恵のある動物が得られる権利なのだ。

「とりあえず、今日の所は眠れないな」

小さく呟き、ラミアは苦笑する。

思考するなら、とりあえず一晩。

それで自分の中で自信がある仮説が出なければ、諦める。

いつもの思考の仕方である。

答えが出ない問答ほど無駄かもしれないが、だが思考する事のみ
思えば無駄ではない。

むしろ考える事を止めてしまうことこそ 一番の無駄だ。

そこで無駄な思考を省くと、ラミアはまた思考し始める。
ただひたすら、思考を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4554s/>

蒼鎧闘駆(ブルーウォーリアー)の幻想疾走

2011年10月8日22時48分発行